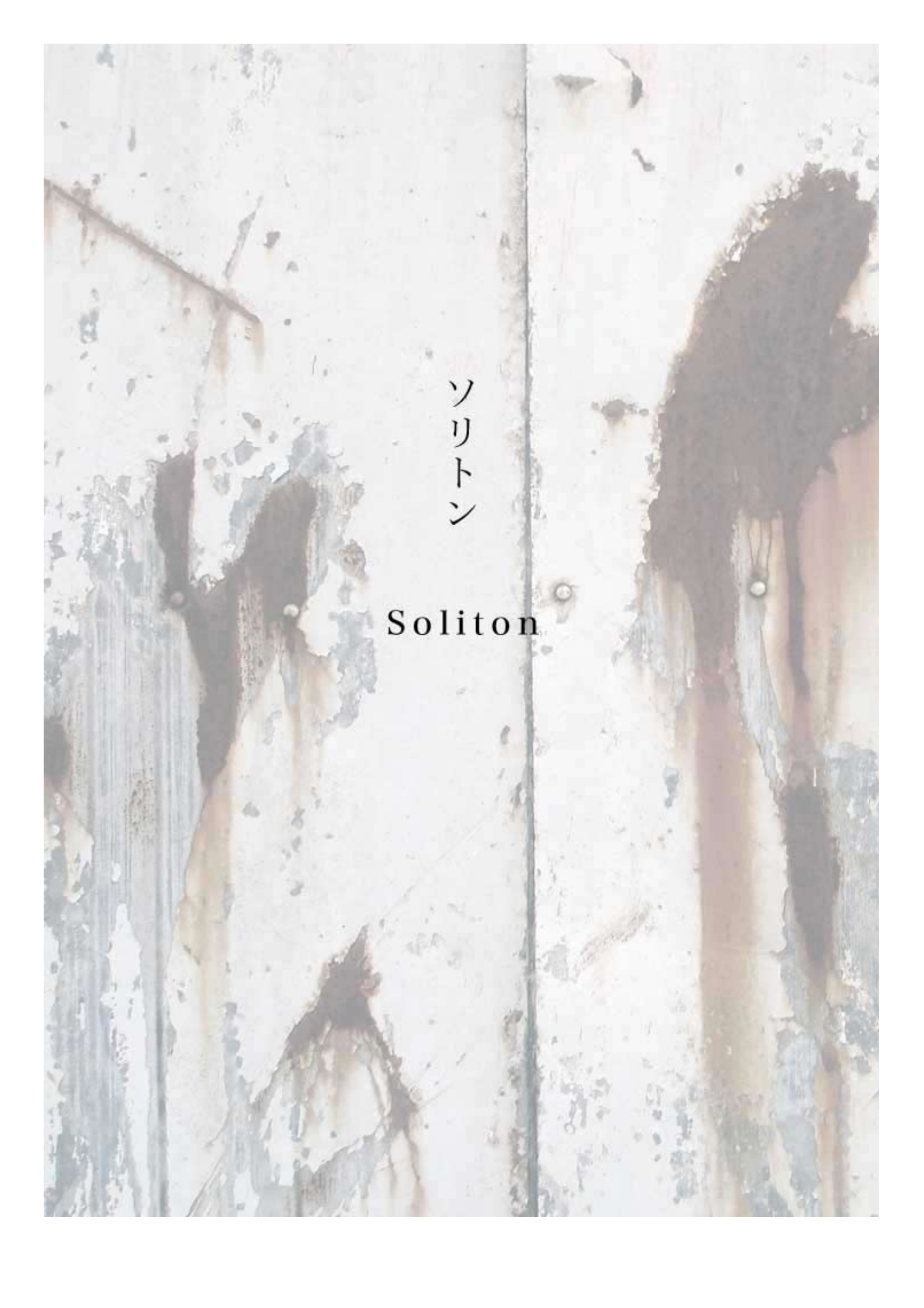


soliton

ソリトン  
ケイコモリ

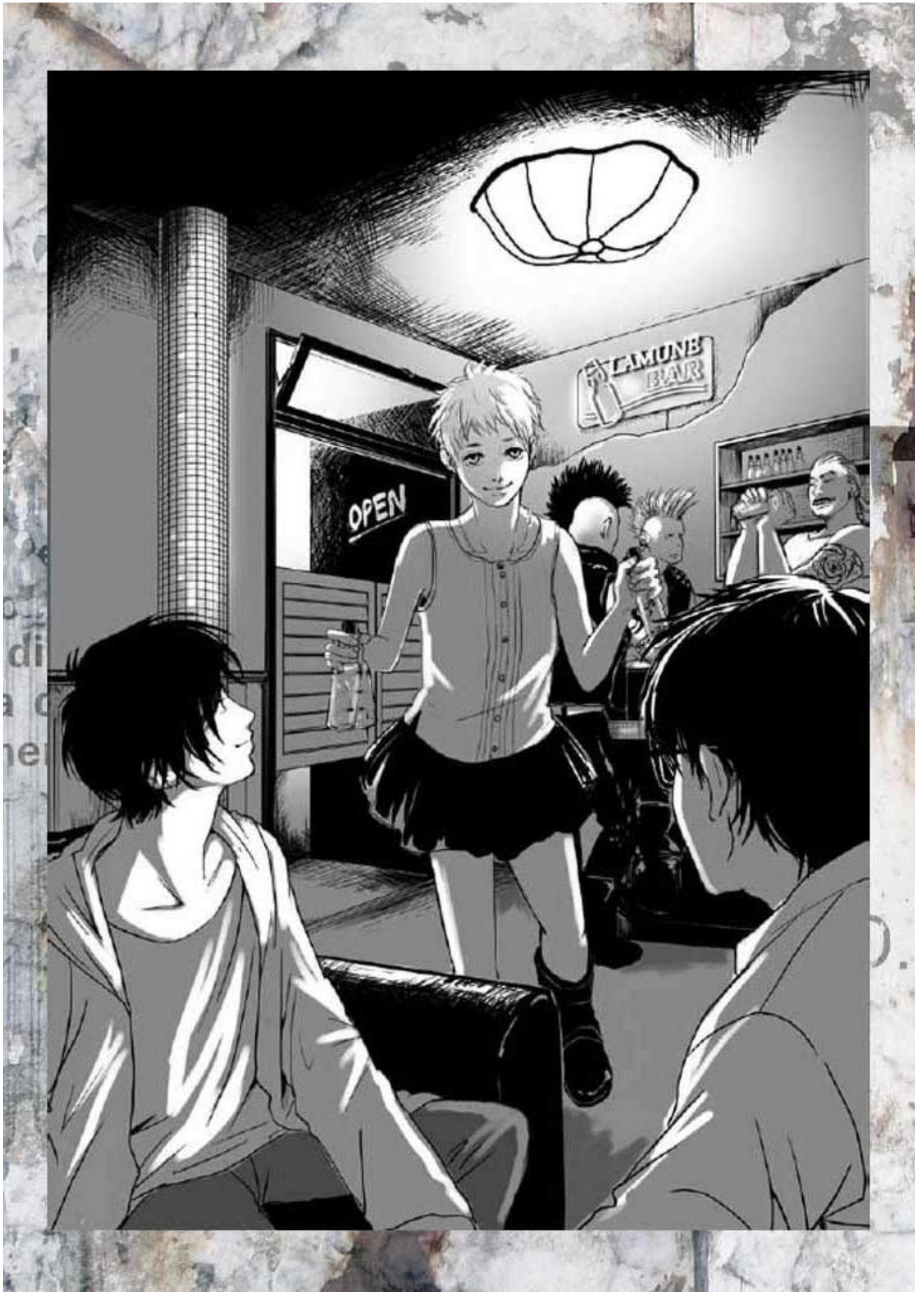




ソ  
リ  
ト  
ン

Soliton





# Mattank

Yagura tower

Densyo bato

Susuki field

Mushiba kagerou

Dr. science's garage

Factory

Cemetery

Slum

Park

Nishi no hate

Hospice

9437 banchi

Izki's apartment

Power plant

Romen liner

Guitar shop

Lamune bar

Callege

Tube liner

Under city

Wall mansion

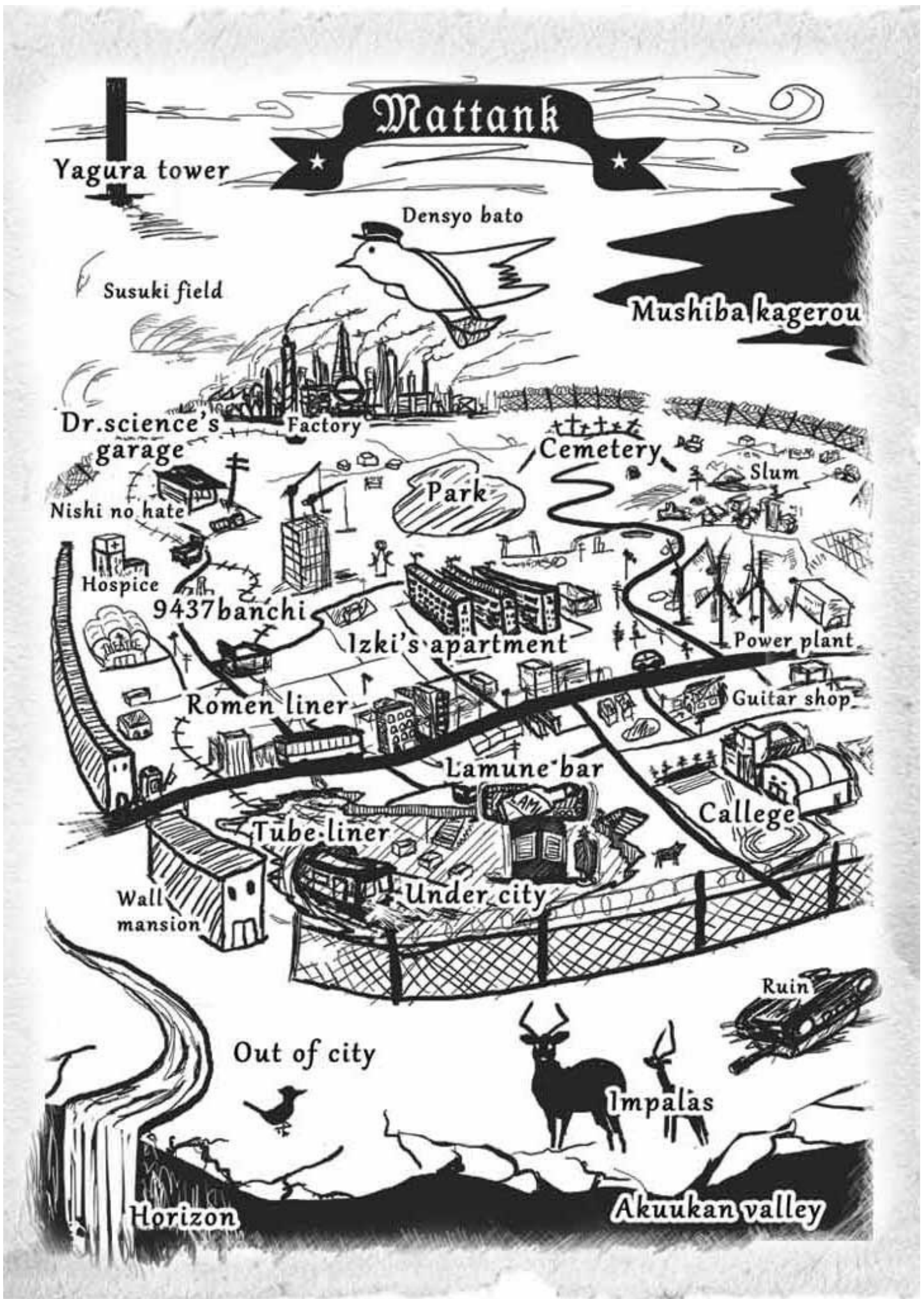
Ruin

Out of city

Impalias

Horizon

Akuukan valley



むしばかぜろう

その日、蝕陽炎とテテが

ぼくの町を襲った。

イツキは真っ先にその毒牙に掛かり、

ヨーイチはその死を哀しんだ。

嘘だ、君なんかより、

ぼくの方がよっぽど彼女のことを——。

A photograph of a heavily rusted metal surface, possibly a piece of machinery or a structural component. The metal is light-colored, likely aluminum or steel, and is covered in extensive brown and orange rust. There are several dark, irregular patches of rust, particularly on the left side and bottom. A vertical seam or joint is visible on the right side. In the center of the image, there is a large, bold, black number '1'.

1

果てしない荒野、誰かの口笛のように切ない風が吹き、枯れたススキが揺らいでも、錆び付いたまま延々と煙を吐き続けるブリキの工場地帯は、何も答えはしない。ここは世界の端っこ、ひっそりと荒廃に囲まれている「末端区」という町。ぼくたちが育った無二の場所だ。

ただ、この町は決して裕福とは言えない。ぼくとヨーイチの両親は仕事を奪われ、子供に残す保険金を目当てに自殺した。ぼくたちの世代はそうやって親が絞り出した金で学校に通っている。仕事に就けるといって確証のないまま、そうする以外にどうしようもないから。そしてたぶんそれは、イツキも同じだ。彼女も両親を亡くしていた。理由は語らないけれど、たぶん、同じだ。だから、ぼくたちがいつか都会で成功したいと考えて楽器を手にとったのも、別に不思議な流れじゃない。ぼくたちのリーダー格のヨーイチが、バンドで金を稼ぐ計画を熱っぽく語ったときも、この町で就職するより、圧倒的に簡単な気がしたくらいだ。

そう、簡単なはずだった。外の世界のことなんか何も知らず、そしてまさかこんなことがぼくたちの身に起こるなどとは、知らなかったあの頃からしたら。

末端区には午後16時の偏西風という、特有の気候があった。地形と町の外の大工場地帯の吐き出す熱風の関係から、その名の通り、毎日午後16時に強い偏西風が吹くのだ。その時間はあまりの強風に、路面電車も通常の三倍くらい鈍行になり、みんなも足止めを食らうから、カレッジの体育館でライブを行うときは、夜の枠よりも、この時からの枠が取り合いになる。ライブのタイムテーブルは完全公平のくじ引き制だけど、きっと裏で誰かが糸を引いている。なぜならぼくたちは一度として当たったことがないし、この日だって、午後16時どころか、午前10時という最高に集まりの悪い時間に演奏するはめになったんだから。それでも、いくらかの客が来てくれたのは、多分ぼくたちの実力が評価されつつあるからだ。

ヨーイチは白いワイシャツの袖をまくり上げたそのしなやかな腕で、イツキの手を取りステージの上に引っ張り上げた。彼女はアンプに立てかけていたシャープなエレクトリックギターを重そうに持ち上げて、観客にお辞儀をし、たるんだストラップに細い首を通した。ぼくはベースのネックを握りしめる。ヨーイチが彼女を掴んだ手とは反対の手で。

ぼくたちのバンドが、イツキのおてんば時代のあだ名にちなんでイツキックという最高にダサイ名前をしているように、彼女はギター兼ヴォーカルとしてステージの中心に立っていた。ダサイこのバンド名の責任の所在を表すように「5-kick!!」とプリントされた最悪なTシャツをカラスのように黒くてふわふわしたスカートに合わせた彼女は、強制収容所にでも居そうな栗色のショートヘア、小柄で色白な体つきだったから、大きなギターを抱えたその様なんか、まるでクマのぬいぐるみにしがみつく子供のように頼りない。でも、演奏を始めてからの彼女は一変する。両足を内股に開き、まるで暴れ回る動物を押さえつけるように、エレクトリックギターを低い位置でぐいぐいと揺らしながら弦を激しく掻き鳴らす。コードが複雑になるほど彼女の身体は低くなり、ギターのネックもブンブン揺れる。彼女は動きの激しいタイプの弾き手で、そうやって力をため込むように身を縮こまらせてゆき、ブレイクの瞬間が来ると、爆発するように両手を広げ、弓なりになって音を高鳴らせる癖があった。その瞬間の彼女は、ベースを担当しているぼくが取り残されそうなほど、高く舞い上がり、強い存在感を放つ。

イツキが忽然と消えたのは、ライブの最中、ぼくたち三人の演奏が最高潮に達したその瞬間だった。糸が切れたように静まりかえっていく会場の音を、ぼくは忘れない。

*I am a bird that is wishing to fly away far away.fly away far away.fly away far away.*



*However, wherever I go, I will recall the home....um.....fly away far away.....」*

ギターソロを抜けたイツキはいつもにも増して澄んだハイトーンヴォイスで歌い上げていた。そしてヨーイチの力強いドラムがブレイクし、彼女の歌声がエレクトリックギターの濁った残響とともに消えていく、ぼくはベースの弦を押さえ、いつものように彼女と目を合わせることで次の音を爆発させるタイミングを取ろうとした。

この演奏中に見つめ合う瞬間が、とても好きだ。それは唯一、誰にも、ヨーイチにも邪魔されず、イツキとぼくがお互いの信頼を確かめ合う暖かい時間だったからだ。いつも、彼女は待っていたように、笑顔でこちらを向いてくれる――。

でも、このときばかりは違ったんだ。彼女はずっと観客席の一点を見つめたまま、なぜかぼくを見ようとしなかった。何か居るはずのない知り合いでも発見したのか。例えば昔の恋人か、ずいぶん前に離ればなれになってしまった友達か何か。でも、それにしても様子がおかしかった。イツキは完全に何かに心を奪われていて、ネックに掛かっていた左手が、みるみるうちに剥がれ落ちていった。おもむろに彼女は片足を乗せていたステージライトをまたぎ、まるで引き寄せられるように観客席に降りていった。

「イツキ？」ぼくは彼女を呼んだ。だが、彼女はこちらを振り返らなかった。

そのとき、群衆の中から何者かの細長い手がすっと伸び、イツキの額に触れた。その瞬間に、彼女の身体は粉碎する灰のように、音もなく、消滅してしまった。

「どういうことだよ」とぼくは震える声でつぶやき、肩に掛けていたベースを降ろしてイツキの居た場所を見つめた。彼女の姿なんて跡形もない。ただ微かな煙が立っているばかりだった。信じられない状況に、ぼくは辺りをキョロキョロと見渡した。いきなりイツキが粉々になって消えた。一体何が、何が起こったかなんて、全くわからない。

そのとき観客席の最前列で、何か白い影が蠢いた。何だ？

突然の惨劇に、観客たちは「ワーッ」という悲鳴を上げて蜘蛛の子を散らすように舞台を離れ、会場の出口に殺到した。ヨーイチはドラムセットの中で立ち上がり、汗にまみれた白いワイシャツの胸元を引っ張り、眼鏡を抑えて一点を凝視している。白い影は、逃げまどう群衆の中に身じろぎもせず、じっと静止してこちらを見つめている。身体に白い布を巻き付けただけのそれは、とても人間に似たかたちをしていたけれど、とても人間とは思えない、異質な生命体だった。眉毛も唇の色もない陶器のように真っ白い肌、まるで色を塗られただけの人形の頭のように全て後ろにのっぺり撫でつけられたずぶ濡れの黒い髪。そいつらの大きく見開かれた眼は異常に白目が大きかった。瞳がないのだ。あるのは中央の黒い点のような瞳孔だけで、針のような不気味に鋭い視線で周囲をギョロギョロと見渡していた。

「おい、お前ら、なんだよあれ.....」クラスメイトのトルビーがぼくに声を掛ける。

ぼくは化け物の戦慄的な不気味さに声を詰まらせて、返事も口々にできなかった。しかもそいつは、一体だけじゃなかったんだ。

どこからともなくもう一体、全く同じ姿をした白い化け物が現れ、ぼくの答えを待っているトルビーに忍び寄った。目を見張ったぼくから彼は察知したか、素早く背後を振り返る。でももう手遅れだった。彼は肩を化け物に背後からがっしりと捕まえられてしまった。

「トルビー！」

彼の身体が突如ガラスのように透け始める。「えっ」驚いた顔で彼は自分の全身を見渡した。彼

の半透明になった身体からは灰のような粒子がキラキラと舞い上がっていた。

「トルビー？」

彼は、何が起きているのか分からない、とにかく絶望的な顔でぼくを見た。次の瞬間、彼の身体は光の煙を上げ、突如爆発するように拡散し、彼が存在していたことさえ疑わしいくらい跡形もなく消滅してしまった。

白い化け物の身にまとった布が一度大きくはためき、次第に収まっていく。化け物は、少しだけ煙がくすぶっている自分の左手のひらを、無表情に首を傾げて見つめていた。

トルビーが、爆発して消えた。ぼくは恐怖のあまり腰が抜けそうになった。ふらついて倒れそうになったとき、腕をヨーイチに掴まれて、ぼくはどうか均衡を保った。

「逃げるぞ！」彼に促され、ぼくは猛然と走った。ステージから飛び降りて、2匹の生命体の横を通り過ぎる。そいつらはまるで首振り扇風機のように静かにぼくたちを見送りながら、近くにいた人々を無差別に襲い始めた。

こいつらはいったい何なんだ？ ぼくは化け物を振り返る。真っ白い違和感。奴らは悠然とした足取りで、逃げまどう人々の後を追いつき、消していった。溶かされていくような悲痛な声がそこかしこで上がる。

「トキ！」とぼくを呼ぶ声がした。クラスメイトのロラだ。化け物が逃げ遅れた彼女の肩に手を掛けていた。「とぎいいいいうえええ……」そのそばかすにまみれた顔が縦に伸びながら透き通ってゆき、皮膚が光の煙になり、骨が灰になって拡散する。

「ロラ！」

返事はなかった。彼女の姿は、トルビーの時と同じで煙だけになっていた。

その後も化け物は止まらなかった。セザムが、エルマイラが、タクヤが、ぼくのよく知るメンツが次々に抹殺されていく。体育館の中は完全にパニックだった。

「どけ！みんな逃げろ！」ヨーイチは逃げまどい右往左往する人の波をかき分け、出口を目指した。

なぜこんなことに。ここは平和な移民の町だ。もともとぼくらの先祖が居たこの町に、戦争を機に色々な国の人間が集まってきて、それでも今まで何事もなく平穏に暮らしてきた、貧しいかわりに軋轢も争いもない場所のはずだった。ぼくは白い化け物に目をやった。そいつは、小さい瞳孔だけの目でギョロツとこちらを見る。その視線に射止められた瞬間、突然、身体が金縛りにあったように言うことを聞かなくなった。

「見るな！」誰かの叫ぶ声がして、ぼくは慌てて目を逸らした。途端に体は軽さを取り戻した。声のした方を見る、出口のところに、町の外れに住む物知りな老人・ドクターサイエンスが立っていた。「あの眼を見れば身体が動かなくなる、あの手に触れられたら消えて無くなってしまふ。死体さえ残らん、完全に無に帰す、確実な死だ」

馬鹿な。トルビーたちは死んだって言うのか。そんなことが、イツキはあいつらに殺されてしまったっていうのか。そんな馬鹿なことがあるか。ヨーイチの手を振り払い、ぼくは立ち止まって逃げまどう人々の中にイツキの姿を探そうとした。居ない、どこにも居ない。ぼくは焦燥した、足が震える。イツキが死んだ、殺された？ そうしているうちに、化け物が煙だけになったロラを払いのけ、壮絶なスピードでこちらに襲いかかってきた。

ヨーイチは再びぼくの腕を引く。

「トキ、逃げるんだ」

「離せ！ イツキが」

「トキ！ お前まで死ぬ気か」ヨーチはぼくの身体をズルズルと引きずる。

「くそ！」ぼくは彼に促され、必死で前を向いて走った。でももう手遅れだった。狭い体育館なのに、とてつもなく出口までの距離は長く、またたく間に奴らはすぐ背後まで追いついた。そしてその恐ろしい腕を、死の指先を、ゆっくりとぼくに向かってを伸ばし――。

あと少しで触れられるというところで、化け物は伸ばし掛けていた腕を引っ込め、片目を押さえて崩れ落ちた。ヨーチが手にしていたドラムスティックを奴らめがけて投げつけたんだ。口を消した化け物はスティックが目に突き刺さったままうずくまり、もう一体も一瞬ひるんだように動きを止めている。その隙にぼくは会場の外に出て、ヨーチとともに重たい鉄の扉を閉め切った。全体重で扉を押さえるぼくの背中に、化け物たちが中から扉を激しく叩く、銃声のように重い衝撃が幾度となく響いた。

ダーン、ダーン、ダーン。

中からは助けて、という逃げ遅れた連中の悲鳴がする。それは一つ、また一つと少なくなっていく、やがては完全に沈黙した。ぼくたちの荒い呼吸の音だけが響いている。でも、次の瞬間、それは起きた。固い鉄でできたはずの扉が、暖められたスライスチーズのようにぐにゃぐにゃ歪み始めたんだ。そしてその表面には、白い化け物の手型と顔型が皮膜を突き破ろうとするように、猛烈に盛り上がり始めた。

「離れろ！ 次元が」サイエンスの声にぼくたちは反射的に飛び退いた。次元だって？ 波打つように変形を繰り返すドアを見つめながら反芻する。

「蝕陽炎（むしばかげろう）、いや、テテか――」汗で落ちてきた黒縁眼鏡を抑え、髪をかき上げながら、ヨーチは絞り出すような声でそう言った。俯いた鼻先から足の雫がきらめいて落ちた。

一体何の話をしてるんだ――。

「逃げるぞ」

ぼくは頷き、ヨーチとともに走り去った。



2

命からがら逃げ出したぼくたちは、狭い赤煉瓦の路地裏に逃げ込んだ。

恐怖に震える足で汚れた水たまりを踏みつける。飛び上がる水滴。そこに写っている空がやけに暗いような気がした。試しに上を見上げる。そして愕然とした。

蜘蛛の巣のように複雑に絡み合う電線の向こうに見える空は、既に暗雲で太陽が隠されていて、その上、端っこの方で何かどす黒い巨大な影がただごとではなく蠢いている。

「トキ！」頭上に気を取られて足を止めかけていたぼくは、ヨーイチに呼ばれて慌てて走り出す。空はすぐに背の高い建物の向こうに隠れた。けれども頭の中にはありありと、今見た光景がこびりついていた。

大通りに出たぼくたちは、そこにちょうど来ていた路面電車に飛び乗った。

「ここまで来れば、きっと大丈夫だ」

でもぼくの心臓の高鳴りは止まらなかった。坂の上を走行する車内から、あの黒い影の正体をはっきりと見てしまったからだ。町の遙か東側に、まるで幽霊の髪の毛のように暗黒な雲が立ち込めていて、うねうねと揺らいでいた。あんな色をした雲は見たことがない。原爆か、それとも何かの天変地異なのか。ただごとじゃないのは確かだった。車内の乗客たちもどよめいていた。せっかくあの化け物から逃げ切ったのに、町全体が何かおかしなことになっている――。

「蝕陽炎」と誰かが言った。「蝕陽炎だ」「むしば……」老人たちが口々にその奇怪な名前を口にしている。

ムシバカゲロウ？ ヨーイチもつぶやいていた、あの聞き慣れない言葉だ。「ヨーイチ、ムシバカゲロウって一体何なんだ？」

彼は手すりにぐったりと寄りかかっていた。「オレも詳しくは分からない。昔、祖母さんに聞いたことがあるだけだよ。末端区に昔から伝わる秘密兵器だ。たぶん放射性物質か、毒ガスのようなもので、覆われただけで万物が滅びるっていう話だ」

「ぼくたちが生まれるずっと前に起きた戦争で使われたっていう、あれか――」

ぼくは窓の外を見た。窓を撫でるように過ぎてゆく建物の影の切れ間から、遙か彼方に荒野と暗い雲が覗いては消える。

ぼくたちの世界は、かつて大きな戦争で使われた強力な次元爆弾によって、バラバラになってしまった。町の外に広がるあの荒野の果てには、爆弾の傷跡、衝撃で開いてしまった次元の狭間が、亜空間バレーと呼ばれる巨大な谷となって横たわっている。この町以外のあらゆるものを飲み込んだまま。そして終戦後、行き場を失った外の世界の生き残りがここに押し寄せてきて、この町は今の姿になった。末端区という名は、世界で唯一生き残った孤独な町という意味を込め、付けられた。それがこの町の歴史だ。教科書にも載っている。

でも、当時の技術力では、世界をバラバラにできるほどの強い次元爆弾なんか作れるわけがない。だから、爆弾が落とされたときには、もう既に世界は滅んでいた、小規模の爆弾でもじゅうぶんな威力を得られるように、あらかじめ世界は別の兵器によって、根っこを溶かされた草木のように大部分を滅ぼされていたって噂されている。ヨーイチが言っているのは、その次元爆弾を落とす前に使われた、“兵器”のことか――。

「世界が終わる、悪魔の霧だ」とシルバーシートに座っていた老婆が付け足した。

「悪魔の霧」ぼくは反芻する。電車が揺れる。吊革を掴みながらぼくは訊く。「あの会場にいた

化け物は何か関係があるの？」

「化け物？」座ったままステッキにもたれかかった老婆が、うめくように聞き返した。

「そう、真っ白い恰好をした化け物。瞳孔がない不気味な目をしていて――」

「それは間違いなくテテだ。蝕陽炎を連れてくる殺人兵器」バスの中がどよめいた。みんな、年配者は何か知っているのか。「テテは、あの霧よりも先に町に入り込み、人々を静かに消していく、冷酷な化け物だ。お前さんら若いのが生まれる遙か昔、戦争であれが使われた。空に夥しい数の飛行機が飛び、そこから奴らが降ってきた。わしの旦那も親も、あれに――」

「でもそんなもの、ただの言い伝えだ」ヨーイチは遮った。「馬鹿馬鹿しい。だいいち戦争は、もうとっくに終わったんだ。きっとこれは何かのアトラクションだ。そういう伝説を誰かが忠実に再現しようとしたイタズラに過ぎない」

そうだよ、イツキが消えたなんて、死んだなんて、信じられるわけがない。そう思った瞬間、老人たちは一斉にその濁った瞳をぼくらに向けた。

「テテに消された人は、本当に死ぬんですか」と、ぼくは恐るおそる尋ねる。

「そんなに信じられないなら、確かめれば良いだろう」

ぼくは確かめるため、あらゆる方法を執ったんだ。イツキの携帯をコールした、繋がらない。メールした、届かない。彼女と一緒にいそうな人に連絡を取ってみた、「今日ライブなんですか？ え、もしかしてあななたち一緒じゃないの？ なに、アイツまた寝坊？」。ぼくはため息を吐いて電話を切った。

ヨーイチが肩に手を置いた。「バーに行ってみよう」

ぼくたちは地下街のラムネバーに行った。薄汚れたアンティークな扉を開け放つと、カウンターに並んだ常連のモヒカンヘッドたちが、屈強な腕でラムネ瓶を握りしめたままいっせいにこちらを振り返る。「イツキ、来てないか？」彼らは同時に首を振る。店内を見渡す、やはり彼女は居なかった。ぼくとヨーイチは眼を細めた。

「一杯飲んできな」マスターはラムネ瓶をシェイクしてぼくたちの前に置いた。ビー玉を押し込み、間欠泉のように吹き出すラムネを口いっぱい受け止める。

「イツキちゃんに会ったらこれを。こないだのポイントだ」マスターは立ち去るぼくにビー玉を投げた。

ぼくは、空中をきらきらと回りながら飛んでくるそのさまを見て、イツキがカウンターでいつもうっとりこのビー玉の中を覗き込んでいる姿を思い出した。ビー玉のポイントチャージなんて、ただでさえかさばる上に、一本のラムネにつき1ポイントしかもらえないのを100ポイントもためてようやく一本になるという、とてもけちくさいサービスだ。なのに彼女は丁寧にぜんぶ巾着袋に入れて持ち帰っていた。ぼくとヨーイチは要らないって分かっているから、マスターはこうやって彼女にしかビー玉を渡さない。ぼくはそれを受け取り、ポケットの中に入れた。

「あの子のポイントはもう満タンだよ」とマスターは言った。

「嬉しいんだろうな、マスターは」とヨーイチはつぶやいた。「初めてじゃないのか？ 100ポイント貯めたやつなんて」

「ああ。初めてだからオレもワクワクしちゃうな。でもこれで次回はちゃんど一本無料サービ

スするよ。男の約束だからな。逃げも隠れもしないから顔出しなって伝えといてくれ」マスターは無精髭の口元をほころばせ、金歯を見せた。

「原価いくらだよ、ケチリやがって」ヨーイチは吐き捨てるように言って扉を閉めた。

イツキは、一体どこに行っちゃったんだ。切れた電線の垂れ下がる薄暗い町。カラスが鳴く、錆び付いた丸っこい車が行き来する。傾いた螺旋階段、ひび割れたコンクリート、無造作に置かれた原色のドラム缶。何もかも、いつも通りだ。ぼくたちが楽器を背負って3人で歩く道。ただ、イツキだけが居ない――。

病院にも運ばれていない、警察にも該当者はない、楽器屋にも居なかった。もしかしたらもう家に帰っているのかもしれない、そう思ってぼくは彼女の自宅に電話した。でも、リーン、リーンと発信音が鳴るだけで、一向に出る気配はなかった。

肩を落として歩くぼくたちが向かったのは、町外れの共同墓地だった。この町では、データベース化された区民全員の生体認証と墓堀システムとが連動している。つまり、死ねば自動的に墓が立ち上がるしくみになっている。だからこの町に、厳密な意味での行方不明とか消息不明とか失踪という概念は存在しない。例え猫のように人知れず死を遂げたとしても、この墓堀システムのお陰で死んだことだけは明確になる。この町の墓は、死亡証明と死亡通知を兼ねるんだ。

そこには、つい最近来たときと比べると、明らかに真新しい墓がいくつも建っていた。まさかと思って近づくと、そこにあったのは、

『Tolby-02837123』

トルビーの墓だった。

それだけじゃない、

『Lola-09697135』

ロラ、

『Sezam-08347423』

セザム、

『Tackjah-04777509』

タクヤ。

テテによって消されたクラスメイトたちの名が苗字（ナンバー）とともに刻まれている。そして、それらの墓の向こうには、イツキの墓が、あった。

『Our diva Izki-05613584』

「嘘だ。信じられるわけがない」ぼくはポケットから、カメラを取り出した。その中にはライブが始まる前のイツキの姿がありありと映っていた。何も知らず、子供のような無邪気な笑みでピースをする彼女。ギターの重さによるけそうな彼女、ラムネをごくごく飲み干す彼女、そして、ぼくとヨーイチの間で、ぼくのあげたレコードジャケットを手に、静かに微笑んでいる彼女。ぼくは胸が詰まる思いでカメラをしまった。

別に、ぼくと彼女は付き合っていたわけではない、お互いの気持ちを確かめたことも、身体を

合わせたことも、手を繋いだことさえもない。ぼくは彼女にとってただの友人に過ぎず、それどころか彼女はヨーイチのガールフレンドだった。ただ、それでもぼくは彼女のことが好きだった。彼女がぼくのことを仲間としか思っていなかったとしても、一緒にいて、演奏中に互いの目を見合わせられたら、それだけで良かった。それなのに、どうしてそんなささやかな幸せさえ奪われるんだ――。

「嘘なものか」ヨーイチは墓石の前にへたり込む。「これが現実なんだ」

墓石を前にして、彼の方がぼくよりもむしろ冷静にイツキの死を受け止められたのは、どうしてだろう。頭が良いからか？ イツキを愛して、いなかったからか――。

愕然とした。ぼくは墓石に触れ、名前の下に彫られていた『5-kick』という拙い文字を指でなぞった。石の表面は残酷なくらいざらざらしていた。感覚に溢れていた、ありありとして。

何かの悪い冗談だろ。もう彼女には会えない、あの愛くるしい大きな瞳を見ることもできない、突き抜けるようなハイトーンヴォイスでぼくの書いた詩を歌い上げるあの声も、もう聴くことはできない。そんなこと、どうして信じられるっていうんだ。こうしている間にも、墓石の影から「なんちゃって」って馬鹿みたいな声を出しながら、ひょっこり顔を出しそうなのに。あのダサイTシャツ姿で。

「これがこの町が招いた、末路なんだろうな」とヨーイチは皮肉っぽく口元を歪めてつぶやいた。「全部この町がいけないんだ。どれだけ経済が破綻して貧しくなっても、依然として旧時代の文明と古典的な政治システムを使っているから。おまけに誰もこんな古くて薄汚い町を愛してなんかいない。愛してもないくせに自分たちの居場所だけは守ろうとして、外交を断っているからこんなことが起こる」

でもぼくは反発した。「でもヨーイチ、外の世界なんて――」

「トキ、外に何があるか、調べようとしないうのもこの町だ。亜空間バレーの向こうには、メガロポリスがあるんだ。ここよりももっと発展した都市が存在するんだよ。戦争経験者は、みんな臆病になっちゃったから、そういうことを確かめる勇気すら持てないんだよ」

「いったいヨーイチは何を根拠にそんなことを言えるんだ」ぼくは反論した。この町が憎いのは分かる。貧しいこの町を愛せないのもわかる。でも、ありもしない外の町での成功なんかを夢見て、おまけにその現実逃避にいつもぼくとイツキを振り回して。

実のところ、ぼくはヨーイチが夢見て語った外の世界での成功というものに対して、あまり気乗りしていなかった。それはたぶん、イツキも同じだったと思う。ぼくたちは表向きはこの町の外の世界に音を届けたい、というコンセプトでバンドを組んでいたけれど、本当の意味でそれを切望しているのはヨーイチだけだった。ぼくも、イツキも、この町のことを彼ほど憎んでなかったし、この町の外に、本当に彼の言うような理想郷があるなんて、どうしても想像できなかったんだ。ここは戦争の生き残りがなだれ込んできた移民の町、世界の端にかろうじて残った集落だ。この町の外、荒野の果てにあるのは、亜空間バレーでしかない。底なしの深い谷がどこまでも続き、餌をなくしたインパラの大群がたびたび集団で身を投げている。死骸の降り注ぐ谷のすぐそばには、戦争で滅んだ文明の遺跡があり、地の果てには、宇宙にしたたり落ちる滝があるだけの何もない世界が広がっている。末端区は焼け残った陸の孤島。「外の世界のことなんて、本当のことは誰にも分かんないし、もしそれでも外の世界に行くんなら、そのときはこの末端区って



町を背負っていきたくない」イツキは前にそう言っていた――。

「知ってるからだ」ヨーイチは静かに告げた。「オレは、知っているんだよ」

ぼくは首を振る。賢い人間は皆、この町の行政上の欠点とかシステムの欠陥とか、ぼくやイツキにはわからないものに気がついて、ぼくやイツキなんかよりも深く町を憎しんで、別の、もっと全てのシステムが完備された理想の町に憧れる。でもそんなものは単なる理想でしかないんじゃないのか。ただ目の前のことから逃げているだけのように見えて仕方がない。それとも、頭の良い彼らには、ぼくには気づきもしない何かが見えているのだろうか。

「荒野で、外の世界の人に会って、聞いたことでもあるっていうのかよ」

ヨーイチは笑っただけで、それには答えなかった。「良いか、これが閉鎖的なセクションの末路だ。弱い人間と同じなんだ、自分たちの殻に閉じこもり、外に出ることを躊躇しているうちに世界中から取り残される。そしていつしか目も当てられないくらい時代遅れの町になっていて、そこに住まう人々だって類人猿みたいに、外の先進都市からしたら言葉さえ通じなくなる。話し合いの通用しない相手に、大きな力を持った国家が対峙したらどうなるか分かるか？ 一つ目は圧力、二つ目は沈黙、そして三つ目は、戦争だ。お前だって、聞いたことがあるんじゃないか？

ゲリラ部隊の話」

彼が言っているのは、外の世界からの侵略者か、あるいは前の戦争の残党かわからないが、とにかくゲリラ部隊みたいなものが末端区のどこかに潜んでいるという噂話のことだ。「ヨーイチは本当にこの世界の外に巨大な文明都市が存在するって思うのか？」

「同じことを何度も聞くなよ」彼は言って眼鏡を押さえた。「イツキやトルビーたちが死んではっきりした。蝕陽炎は、本物だ。外の国がこの町を見つけて圧力を掛けてきているんだよ。昔の兵器を使って、戦争をしかけてきやがったんだ。あの谷の向こうには、ちゃんと他の国があるんだよ」

ぼくは眼を細めた。「どうしてそんな外の世界でも、行きたいって思えるんだよ」ぼくはつぶやいた。「もし仮に、ヨーイチが言うような国だの都市だのがこの末端区の外にあったとしても、それは戦争の勝利国が統治する非道な世界じゃないか。現に、こんなふうにしつぽけな町を滅ぼそうとしているんだろ？ そんな奴ら、誰もぼくら外国の音楽なんかに耳を貸しちゃくれないよ」「イツキが居ないのに、もう都会での成功もクソもないだろ」ヨーイチは吐き捨てるように言って立ち上がった。「オレが言いたいのは、力のない町には居続けたくないってことだ。自国の庶民も守れないほど貧しく、脆弱だから、オレたちは突然自分たちの大事な奴を失ったんだ。違うか？」

そのとき墓石に止まっていたカラスが鳴き声を上げて飛び去った。ぼくはカラスの行方を目で追い、その後、それとは反対側の地平線に目をやった。町の外れの高台にあるこの墓地からは、この町の外側、つまり荒野と工場地帯がよく見える。

愕然とした。

暗雲の真下になったブリキの工場群が、ゆらゆらと揺らめき、ものすごい早さで黒ずんでいく

。

それは別に日光が当たらなくなっただけで影になっているんじゃない、何かの病気に浸食されていく生き物のように真っ黒い斑点が広がっていて、それに苦しむように鉄骨が揺れるたび、表面から剥がれた錆が荒野に降り注ぎ、そこから新たに黒い鉄骨が伸び、薄汚い工場プラントが木のよう

に生えたかと思うと、喘ぐように崩れ、崩壊した。折れ曲がる煙突からもうもうと吐き出される黒煙は、中空でねじ曲がり、空の暗雲を引き寄せるようにその先端と硬く結びつく。雲の下の景色が水の中のように揺らめいて、まるで荒野に飲み込まれていくように壊れていった。

あんな屈強なビルが、足を撃ち抜かれた兵隊のように崩れ落ちていく。

町の周囲に張り巡らされた有刺鉄線の金網も、その粉塵にまみれて消えていく。ぼくはその光景をずっと眺めていた。



3

最後にぼくとイツキが二人で会ったのは、一週間前の夜だった。普段は彼女がヨーイチとともにぼくの家に遊びに来ることが多かったが、その日はたまたまヨーイチが何かの用事で来られなかった上に、イツキも手紙の配達に来るから家にいなきゃいけないで、それで初めてぼくは彼女の家に上がり込むことになった。

「伝書鳩、時間指定しちゃったから。あれ、直前の変更が効かないんだよね」彼女は少し困ったような顔でそう説明した。でも別にそれはぼくの誘いを断っているわけじゃなかった。「だからうちでも良い？」そう付け足したんだ。

本当は、断りたかったのはぼくの方だった。ヨーイチを差し置いて、イツキと二人で会うのは、何かの均衡が崩れるような感じがして気が乗らなかったんだ。ぼくは彼女のことを好きだったけど、それ以上に彼女と、彼女の好きなヨーイチの幸せを願っていたから、自分の気持ちをしまいこみ、仲間として二人の関係をそっと見守っていた。不運だ、よりによって、彼女の相手がぼくの最も尊敬する幼なじみのヨーイチだなんて。

イツキの家は古いマンモス団地の一室だった。建物の中にはとっくの昔につぶれた時計店や床屋がそのままになっていて、薄暗くてじめじめした階段を昇った先の3階に、彼女の部屋がある。ちょうど外から見ると、いかがわしい歯医者看板の上にベランダがあった。でも別に彼女は時計屋とも床屋とも歯医者とも何の縁もない。ずっと前に他界した両親の残した、彼女には少し広すぎるこの部屋を、拠点にしているだけだった。

「買い置きのラムネ切らしてるから、ココアしかないけど？」

「構わないよ、何でも」ぼくは部屋の真ん中に置かれた革張りの黒い無骨なソファに腰掛けて、部屋の中をぐるっと見回した。灰色のタイルがところどころ剥がれかけた床の中央は、絨毯の代わりに黒い適当な木材でフローリングのように覆われていて、その上にテーブルが置かれていた。壁は少し黒く煤け、上の方は恐らく生前のお父さんが吸っていたんだらう、煙草のヤニに汚れていた。家具はシンプルなスチール製ばかり。イツキらしいアイテムなんて、カーテンと、壁際に立てかけられた紫の電気ギター、壁に貼られたパンクバンドのプロマイド、そしてところどころに取り付けられたファンシーグッズくらいのものであった。

「なんか意外だな」とぼくは言った。「もっと可愛い感じの部屋なのかと思ってた」でも、それもまた彼女らしいと言えそうかもしれない。

「汚い部屋でごめんね」イツキはマグカップになみなみ入れたココアを、熱いあつい言いながら大変そうに運んできた。ラムネバーに行けば一度に飲みきれないくらいの量を注文するし、ビー玉はきっちり全部持ち帰るし、レコードショップに行ってもじっくり聴いたら何ヶ月かかるかわからない量を一気に買う。とかく彼女には妙に欲張りなところがあった。そしてそういう変に品よくまとまろうとしないところも、この無骨な部屋の感じも、尖ったギターも、ボーイッシュな髪型も、何もかもが線の細いイツキの印象からはかけ離れているところが面白い彼女の魅力だった。らしくないものをチョイスするところが彼女らしさと言えるかもしれない。

「ゆっくりしてって。なんか落ち着くでしょ？」

「まあね」

でも、彼女の男の趣味は定番だ。ヨーイチはスポーツ万能で頭も良く、成績は常にトップクラス。喧嘩は強いしさわやかだし、ドラムだってめちゃくちゃうまい。おまけにクールで優し

くて、とにかく非の打ち所がない男。ぼくみたいに肩が落ちそうなほど首の開いたTシャツなんか着ず、ぼくみたいにチマチマ整髪料で髪の毛をデザインなんかせず、ぼくみたいに眉毛なんか手入れせず、いつも掻き上げたままの髪になんてことのない黒縁眼鏡、白いワイシャツにヴィンテージのルーズなデニムと赤いスニーカーを合わせていて、それだけでじゅうぶんカッコ良い。シンプルなのに色濃い存在感を放っている彼は、何に掛けても天才的で、どうしてぼくなんかといつも一緒にいてくれるのか分からない。男のぼくでさえ昔から何だか兄のように慕ってきた存在だ。

テーブルの脇には赤い羅紗が敷かれた木箱があって、そこにはずらりとラムネバーのビー玉が並べられていた。それぞれが光を受けてキラキラと輝いている。今思えば、そこには既に99個のビー玉が揃っていたわけか。

「どれもこれもが、同じかたちのビー玉だけど、わたし、どれがいつ貰ったものなのかわかるんだよ」イツキは自慢げにビー玉たちの上を指先でなぞった。

「またご冗談を」

「本当よ。順番に入れているからっていうのもあるんだけど、色とか光り方が、微妙に違うの。例えばこれは……半年前にヨーイチとあなたが、トイレの順番でもめて、腕相撲をして、あなたが一瞬で負けて、もらしそうになったときの」

ぼくは苦笑した。「暇だなあ。そんな違いがわかるくらい、この球面一つひとつを見てたのかよ」

「まあね。こういう仕事ないかしら」そう言って彼女は笑った。「ところでこれ、君のは？」ぼくの目の前には依然として一つきりしかココアのカップが出ていなかった。

「ごめん、それがさー、この家にはコップらしきものって一つしかないの。一緒に飲もう」

一瞬どきとした。慌てて話を逸らす。「ところでイツキは引っ越さないの？」

「え？ 引っ越すって？」

「いや、同棲とかさ。ヨーイチと」

「冗談やめてよ」彼女は眉間に皺を寄せて困ったような笑みを浮かべた。「別にそんなんじゃないから。彼、ここの部屋にも来たこと無いんだよ。それに、あたし、ここ、離れたくないし」

「ここを離れたくない？」口ではそう聞き返しながらも、むしろぼくはヨーイチがここに来たことがないという点に驚いた。

「そう。汚いし眺めも良くないし、昼間は近所のガキンチョが、夜は盛りのついた野良猫がうるさいどうにもしがたい部屋なんだけど」

「それなのにここが良いの？」

「この建物、今から40年近くも昔から建っているんだよ。それだけの間、ずっと色んな人たちを受け入れては見送ってきたのなら、これだけ汚れてくたびれちゃうのも、みんなが大声出して騒いじゃうほど気を遣わない場所になっちゃうのも、無理ないと思うんだよね。それだけこの団地が、みんなの中に根付いてるってことだから。ゴツゴツ根を張った、古い大きな木みたいに。それにね、見て、ここ」そう言って、彼女はコンクリートの天井に出っぱっている梁を指さした。「これ、当時流行ってた建築様式なの。横に穴が開いてるでしょ？ そこにボルトを通してね、ハンモックとか、ブランコとかを吊せるんだよ」

「部屋の中にブランコ？」ぼくは眼をしばたたかせた。その光景を想像してみる。彼女がブラン

コに乗ってぐいぐいと漕ぐ、さすがに梁は軋み出す。部屋は地震のように揺れ、彼女のつま先はテーブルを掠めて食器戸棚のグラスを倒す、勢い余って窓ガラスを突き破り外に投げ出される……。

「今は教科書にも載っていない、全然どうでも良い時代遅れの様式かもしれないけど、わたしは好きなの。歴史に残るか残らないかって、他の人からしたら理解を得られないことでも、胸を張って、好きです、って言い続けられる人がどれくらい居たか、なんだと思うな。だからわたしはいつまでもこの団地のこと、守り続けていたんだ。ねえ、もしイツキックが有名になったらさ、『アンメルヘルユニバリウス式アングル型三層構造』って歌、作っちゃおうかな」

「なにそれ」

「だから、当時大流行した、この梁の建築様式よ」

「へえ」ぼくは適当に返したけれど、彼女の目を見ていると、なんだかその思い入れが伝わってくるような気がして、「好きなんだな、ここ」と付け足した。

「わたしが生まれ育った場所だから」

「故郷か」

「そう、プライベート故郷。だから、本当はわたしもトキと同じ気持ちなの。外の世界なんてどうでもいい。それでも、もしも外の世界なんていうものが存在して、そっちに行くことになったら、絶対にこの町のことを背負っていきたいし、その前にこの町で思うぞんぶん歌ってからにしたい。トリコロールよ」

「トリコロール？」

「この町の人たちみんなを巻き込んで虜にするって意味。トレハロース」そう言って彼女は、ココアをかき混ぜたスプーンを曲げようと必死に指でさすり出した。

きっと、彼女は気に入ったものは何もかも自分の中にしまいこみたいんだ。ぼくとヨーイチの心を持ち去ったまま消えてしまったように。

分かるよ、その気持ち。

ぼくは墓地の芝生の上に寝ころんで、じっと涙が止まるのを待っていた。空を見上げていると、伝書鳩が飛んでいた。どうして死者の記憶は、馬鹿馬鹿しいくらい無邪気なものばかり思い浮かぶんだ。あのイツキが、もうこの世に存在しないなんて。一週間前は、あれほど何も知らずに笑っていたのに。つい数時間前までは、ぼくと一緒に曲を演奏していたのに。

いや、でも――。虫の知らせなら、ひとつ、心当たりがある。

そう、さっきヨーイチの話に出てきた例の侵略者だかゲリラだかがこの町に潜んでいるという話をぼくが初めて聞いたのは、他ならない、あの日、イツキからだった。彼女の両親は、ぼくと彼女が出会った頃にはもう他界していて、あの部屋がイツキに託されたわけだけど、その原因をずっとぼくは知らされずにいた。事故か病気だとばかりに思っていた。ところがその日、伝書鳩が配達にやってきたとき、その真相を知るはめになったんだ。

時間通り、頭に紺色の郵便帽を乗せた白い鳩が飛んできて、ベランダの手すりに止まり、ぽっぽるるう、と一声鳴いた。イツキは窓を開け、鳩から何枚かの白い封筒を受け取った。

「ご苦労さまでした」ぽーぽーっぽっぽるるう、鳩は飛び去っていった。

彼女ははじめ「*I am a bird that is wishing to fly away far away.fly away far away.....*」と自分の唄を機嫌良く歌いながら白い封筒を一枚ずつ裏返して、宛名と差出人を確認していたんだけど、三つ目の封筒をひっくり返した途端に、凍り付いたように動かなくなった。

「どうしたの？」とぼくは彼女の側に行き、封筒を覗き込む。「これは」

「お母さん.....」イツキは呆然とつぶやいた。

「お母さん？」ぼくは彼女の顔を覗き込む。「イツキの両親って、確か.....」

イツキが固唾を呑んだのが、唇の動きで分かった。「わたしの両親は、ここで殺されたのよ。わたしが15歳のとき、朝、わたしが学校に出かけた直後、町に潜んでいた“侵略者”の手で.....」彼女は大きな眼をいっそうまん丸く見開き、凍り付いていた。「死体も残らないくらい、徹底的に殺されてしまった」

死んだ人間が、手紙なんか書けるわけがない。「イツキ.....」

「ごめん、ちょっとびっくりしちゃった。たちの悪いイタズラね。親が死んでもめげずにやってくる人にこんなことして、何が楽しいのかしら」そう言って彼女は手紙を開封しないままテーブルの上に放り投げた。

ぼくは指先に触れた芝生を握りしめる。そうか、彼女の両親を殺した侵略者が、あのテテだったんだ。イツキのした、死体の残らない死という言い回しが、それを如実に物語っている。

そう思った瞬間、視界の端を飛んでいた白い鳩が空中で身をよじり、やがてゆらゆらと揺らぎ始めると、またたく間に羽ばたきを止めて放り投げられたボールのように地面に落下してしまった。何かか潰れるような砕けるような、複雑な音がした。気付けば蝕陽炎の霧は空の三分の一近くを覆っていた。町の外側の工場地帯はもうほとんどが廃墟と化していて、崩壊はそれでも止まる気配を見せず、万物をゆらゆら揺らしながらこの末端区に迫っていた。あんな屈強な建物が破壊されてしまうんだ、これだけ離れていても鳩程度の生き物なら死んでしまうというわけか。何なんだ、何が目当てなんだ。「たちの悪いイタズラね、何が楽しいのかしら——」イツキの声が甦る。このゆらゆらは、あの化け物は、何が楽しくて、ぼくたちの世界を壊すんだ。

「見るよ、これが外側の世界のやり方なんだよ」とぼくはヨーイチに向かって言い放った。「それでも、こんなことをされても、この町の外側に、希望なんかあるって思うのか？ イツキは奴らに殺されたも同然じゃないか。それでも君は外の世界の肩を持つのか？」ヨーイチに当たっても仕方がないことくらい、分かっていた。分かっていたけれど、それでもしない限り、ぼくの気持ちは収まらなかった。

ヨーイチは無言でぼくを見つめていたが、やがて「行こう」と行った。「あのゆらゆらがここまでくるのもたぶん時間の問題だろう。このままじゃ、オレたちまで死んじまう。ひとまず地下に逃げるんだ」





その日のうちに町は一変してしまった。

煉瓦造りのビル群の下、不安げに肩をすくめて歩く浮浪者たち。南へ空を見上げながら走る人の波。交錯し、ぶつかり、子供たちははぐれて泣き叫ぶ。あらゆる家は堅く扉を閉ざし、嵐に備えて窓に板を打ち付けていた。ガスマスクをした男の絵と「STOP TO ムシバカゲロウ」と書かれたポスターが、町の至る所に貼り付けられていた。けれどもその多くはあっという間に薄汚れて風に流された。

テレビジョンではニュースが『人間の形をした謎の生命体に襲われ、消滅するという怪事件が各地で発生している模様です。監査局はその生命体と東側に立ちこめた暗雲との関連性を調査していますが、依然としてはっきりとしたことは分かっていません。皆さん、信憑性の低い情報に流されず、落ち着いた行動を……』と報じているが、ガシャーン、瞬く間に画面は心ない酔っぱらいにたたき割られて砕け散る。

どんなに注意を呼びかけたところで、誰もその驚異から逃れる正しい方法を知らない以上、無駄だった。各々が各々の信じる策を執り、そうでないやつはこの酔っぱらいみたいに全て見ないフリをする。

でも、悪夢は着実に忍び寄っている。酔っぱらいはドアを押し、外に出た。しゃっくりを一度して、屈強な腕をぶらつかせながら、ふと自分の左を振り返る。そこに立ちつくす、二速歩行の白い生命体。酔っぱらいの目がみるみるうちに見開かれていく。生命体の長い手が彼の胸に触れる。そして彼は消えた。テレビジョンの画面のように、粉々に砕け散って。

電線に止まったカラスは全てを見守るように身を屈め、羽を広げた白鳥はあらゆるものを見放したように舞い上がる。舞い落ちる黒い羽根、逃げまどう人々、地に落ち踏みこまれる白い羽根。たくさんの背の高いビルが建っているにもかかわらず、どれもゆらゆら落ちてくる絶望の空を止めることはできなかった。喫茶店の明かりが歩道を照らし、未だ知らない路地裏の闇が曲がり角を閉ざす。瞬いた後に照らし始めた電灯と、もう灯ることのない窓の明かり。町中の明かりが次第に消え始める。走ることを忘れた自転車に、溜め込むことを覚えた郵便ポスト。鳴り響く踏切と、一向にこない電車。そして蝕陽炎の雲が来る方とは逆のエリアに移動しようとする車の列、列、列。わずかな間に、町は見慣れない場所ようになっていた。

一体、ここはどうなるんだろう。ぼくたちは、これから先、どうしたら良いのだろう。閉店してもぬけの殻になってしまったラムネバーの前に、呆然と立ち尽くす。

あれほど平穏ににぎわっていた町が、突如として沈没船のようにガランドウになってしまった。そのことがうまく受け入れられない。けれども、町のただならぬ状況を前に、身体は確実に怯え始めていた。イツキが居ない寂しさもまたそこに拍車を掛けていた。

空が不気味にとどろく。ぼくとヨーイチは行き止まりの地下街を抜け出し、薄暗い路地をネズミのように身を寄せ合って駆け抜けた。とにかくもっともっと深い地下へ潜れば助かるかもしれない。その一番手っ取り早い方法は、チューブライナーだ。この町をぐるっとするだけでそれ以上にはどこも行けない回遊魚。あの路線に身を潜めよう。

チューブライナーの乗り場へと続く階段の入り口で、ぼくとヨーイチは足を止め、空を見上げた。蝕陽炎は墓地にいたときに比べると、幾分か高度を落とし、町にのし掛かってきているよ

うに見える。その証拠に、背の高いビルの先端は今にも崩壊しそうなほど、ゆらゆらと揺れていた。ヨーイチが言ったように、時間の問題だ。

ぼくたちは煤けた階段を一步一步下っていった。ヨーイチは墓地を出て以来、ずっと黙り込んでいた。突然の事態にどう対処すべきか考えを巡らせているのか、あるいはイツキの死に打ちひしがれているのか。何を考えているのか全く見当がつかなかった。

階段の中腹や改札階には、既に何人かの人々が、例のポスターにならって黒いガスマスクを着け、座り込んでいた。でもその人数は思いがけず少なく、ぼくはむしろここが本当に安全なのか、不安になった。

「ヨーイチ、あのゆらゆら雲が町を覆った後、確かにここにいれば最後まで生き残れるかもしれない。でも、あのゆらゆらがだよ、この地下通路を徐々に降りてきたりしたら、そのときぼくたちは完全に逃げ場を失うんじゃない……」

ヨーイチは改札の中に入ってからぼくを振り返った。「大丈夫だよ、あんなまじないじみたガスマスクなんかよりよっぽど安全だ。オレたちはただ地下に潜るんじゃない、チューブライナーの駅で待機するんだ。やばくなったら電車で安全な駅に移動すればいい。それに、蝕陽炎が完全に町を覆うまでは、まだあと数日ある」

「数日？」ぼくは眼を細めた。「いったいなんだってそんな根拠のないことを」

「根拠ならある」とヨーイチは言った。「聴けよ」

ぼくは耳を澄ませた。と、そのとき、電車が来たわけでもないのに、ごううううううう、というものすごい風の音が轟き渡った。まさか、と思ってぼくは今降りてきたばかりの階段を、風に押し戻されそうになりながらも駆け上がった。地上に出て空を見上げると、雲が、この町を覆おうとしていた蝕陽炎の暗雲が、ゆっくりと押し戻されていた。ぼくはデジタル腕時計を見る。時刻は午後16時を過ぎた頃。突風が吹き抜け、ぼくは立っているのもままならなくなって地下に逃げ帰った。そうか、午後16時の偏西風だ。

「この町の上には毎日夕方に強い偏西風が吹く。あの雲が東から来ている以上、そう簡単にはこの町を覆えない。もしかしたら、東の彼方に吹き流されるかもしれないぜ」

ヨーイチの声をかき消しそうなほど、風は唸りを上げていた。

「だったら……良いんだけど……」

「まあ、オレだってそんなに楽観視はしていないからな。何か名案が思いついたら、ここを出る。ただ、そのために、ちょっと寄りたい場所がある」彼はそう言いながらホームに下っていった。

「どこに？ ここにずっと隠れているんじゃないの？」

ぼくたちは薄汚れたベンチに並んで腰掛ける。

「まず、安全なうちに仕入れておきたいんだよ、情報を。ドクターサイエンスのところに行くんだ」

「あの爺さんのところに？」

ドクターサイエンスは、現役の科学者を引退した、物知りだけど少し頭のおかしいところがある老人だ。少し前から人間の習性を研究する目的とかで、町中に監視カメラを設置して監査当局ともめ事を起こしているわけだが、ぼくたちはそんなこともお構いなしに、そこで演奏すれば有名になれるんじゃないかって考えて、町中の監視カメラの前で演奏を行うライブツアーを決行

した。それがきっかけで、何十歳も年の離れたドクターサイエンスがぼくたちと交流を持つようになり、中でも頭脳明晰なヨーイチをいたく気に入って、以後、ライブのたびに応援に駆けつけてくれるようになった。簡単に説明すると、そういう関係の人だった。

「オレはあの物知り爺さんが何か知ってるんじゃないかって気がしてるんだ。あの騒動で、オレたちに『テテを見るな』って教えてくれたしな。第一、年寄りのくせにあんな状況から無事に逃げ帰っているのは、それだけテテに精通してると見て間違いない」ヨーイチは眼鏡を押さえた。

「ドクターサイエンスは西の外れに住んでいる。雲から遠ざかることになるからリスクも低い」攻撃的なほど大きな汽笛を鳴らし、ホームに険しい顔をした電車が滑り込んでくる。ぼくたちはベンチを立ち、電車に乗り、空いていた席に座った。

『STOP TO ムシバカゲロウ、STOP TO ムシバカゲロウ、STOP TO ムシバカゲロウ、STOP TO ムシバカゲロウ……』

車内は例の広告に溢れている。ぼくはそれらをぐるりと見渡した。

電車は発車した。ヨーイチの眼鏡を窓の外の連続した蛍光灯が点滅させる。「イツキの分まで、オレたちは生き延びなくちゃいけない」

ぼくたちの乗った電車はどうやら特急で、いくつもの駅を猛然と通過し続けた。社内の空気が淀む、沈黙が流れる。

「ヨーイチ、ぼくさ……」車両は緩やかに揺れている。イツキの家に行ったときのこと、彼に言うべきだろうか。それとも――。

「何だ？」

つり革が振れている。

「いや、なんでもない……」

空き缶が足許に転がってくる。

ヨーイチは素早くぼくの方を向いた。でも、その視線はぼくの顔から次第に別の方へ、もっとぼくの後方にある何かへと注がれた。そして彼の顔はみるみるうちに凍り付いていった。ぼくは不思議に思って後ろを振り向いた。その途端、座っていた乗客全てが同時に顔を上げた。

ぼくは愕然とした。ぼくたち二人以外、電車に乗っていたのはほとんどが白い化け物、つまりテテだったんだ。みんながみんなあの髭も眉もないプラスチック製みたいに見分けのつかない顔をして、同じような白い布をまとっていた。灰色がかった車内は真っ白いテテたちに埋め尽くされて、大量のバリウムを浴びた世界のように色彩を失っていた。

テテ以外にもさっきまで何人かの乗客が乗っていたらしかったけど、既にテテに触れられて消滅してしまったようだった。床には読みかけのニューズペーパーやラムネの瓶、そして彼らが着けていたとおぼしきガスマスクがいくつも転がっていた。その真上では、虚しく「STOP TO ムシバカゲロウ」の吊り広告が虚しく揺らめいていた。「あんなもん、何の役にも立ちやしねえのに……」ヨーイチがつぶやいた。

車内の至るところで人間の焼き消えた煙がくすぶっている。吐き気がした。どうしてもっと早く気づかなかったんだらう。これではみすみす自分たちから地獄の中に飛び込んだようなものだ

化け物たちは、白い画用紙に空けられた穴のような眼でいっせいにこちらを見る。まるで侵入者を駆逐するような威圧感。「ヨーイチ……」ぼくは恐怖のあまりそうつぶやいた。

「見るな！ 目を合わせたら動けなくなるって言ってただろ」

「無理だ……こんなに居たらとうてい逃げられっこない」

ぼくはそれでも目を逸らそうと努めた。でも、駄目だ、何度目を逸らしても、視線が奴らに吸い寄せられる。そして足に力が入らなくなる、膝が震えて言うことを聞かない。ほんの一瞬でも触れられれば、それだけで死んでしまうんだ。これまでの人生とか、努力してきたこととか、人からどれほど必要とされているかとか、そういうことに一切関係なく。しかもそういう能力を持った化け物がこんなにたくさん居て、ましてここは走り出した電車の中だ。一体どうやって逃げ延びれば良いんだ――。

「だったらお前、あきらめて死ぬか？」

ぼくは息を呑む、化け物たちはいっせいに口を開いて息を吐く。白い世界に不吉な黒い穴が無数に開いてゆく。おもむろに、ぼくの向かいに座っていた一体のテテが立ち上がる。白い衣服の裾がゆっくりと揺れて、骨張った足が一步踏み出された。駄目だ、足に力が入らない。

そのとき、ぼくはヨーイチに二の腕を強く引っ張られた。はっとして走り出す。一斉に襲いかかってきたテテの指先が、ギリギリのところを掠めていく。背後で勢い余った無数のテテが折り重なる音がした。でもまた新たなテテがぼくらを追ってくる。まるでいっこうに逃げ切れないぼくたちをあざ笑うような、踊るように優雅な歩き方で。

全速力でぼくとヨーイチは隣の車両に駆け込んだ、けれどもそこにもまたうつむいたテテたちが溢れていた。ぼくたちが踏み入れると同時にゆっくりと顔を上げ、口を開いて吐息を吐く。両側の座席に座ったテテたちが津波のように立ち上がり、覆い被さるように飛びかかってくる。ヨーイチは走りながら、ドア際の外れかけていた鉄パイプの手すりを引っっこ抜き、空中でテテを受け止めた。ドラムで鍛えた彼の筋肉が白いシャツの下で盛り上がる。テテたちはバク転をするようにのけぞってはじき返された。

「戦略的だな。蝕陽炎が入り込めない地下はテテが率先して制圧か……」ヨーイチはそう言って歯ぎしりをした。「ゲリラか」

彼は横から回り込んできたテテをなぎ払うと、その勢いのままテテの群に鉄パイプを投げつけ、ぼくの手を引いて走り出した。鉄パイプをかわすために、テテたちには一瞬、隙が生まれた。でも、走りながら窓ガラス越しに後ろを見ると、一体のテテがすり抜けるようにしてしつこく追ってきているのが見えた。優雅につり革の一つひとつにそっとに触れながら、確実に迫ってくる。唯一救いだったのは、そのテテが片目だったことだ。右目をつむり、左眼だけでこちらをじっと見つめていたが、瞳の力が半減するのか、目が合っても金縛りにならずに済んでいた。

「あの時のテテか」ヨーイチは舌打ちをしながらそう言った。思い出した、そうか、ライブ会場の体育館から逃げ出すときにヨーイチの投げたスティックが片目に刺さった、あのテテか。「恨まれてるらしいな」

そう言い終わるか言い終わらないかのタイミングで、不意にヨーイチが立ち止まった。ぼくはその背中にぶつかった。行き止まりだった、つまり、一番前の車両に来てしまっていたんだ。しかもその車両には、既に夥しい数のテテが待ちかまえるように立ちはだかっていた。振り返る、背後からは片目のテテを筆頭に、無数のテテたちが洪水のように押し寄せてくる。

さすがのヨーイチも顔を歪めて「ここまでか」とつぶやいた。

片目のテテがものすごい勢いでぼくに飛びかかってくる。ぼくもあきらめて目を閉じかけた。その瞬間だった。車両の下から甲高いブレーキ音が聞こえたのは。テテの手はぼくの手前で空振りし、勢い余ってそのまま駆け抜けるように運転席に突っ込んでいった。何かにぶつかる堅い音と、運転手の悲鳴が聞こえる。間髪入れずに、まるで片目のテテの失敗を拭おうとするように、それ以外のテテたちが一斉に飛びかかってきた。ぼくとヨーイチはしりもちをつくような勢いでしゃがみ込んだ。それとタイミングを合わせるかのように、

キィィィィィィィィィィィィィィィィ

とブレーキがいつそうきつい悲鳴を上げた。後ろから飛びかかってきたテテたちは、またたく間にぼくとヨーイチの上を飛び越えて、前方のテテたちに正面激突した。そして電車は完全に停止して、すぐそこの扉が開いたんだ。助かるかもしれない、ヨーイチとぼくは這うようにしてその希望の隙間に飛び込み、ホームに転げ出た。

でも、胸をなで下ろしたのもつかの間だった。すぐにテテたちは何事もなかったかのようにその仮面のような顔をこちらへ向け、眼を飛び出たし、まじまじと大きく見開いた。瞳の小ささが強調されて、テテの顔は悪魔のように不気味に見えた。そして一斉に締めかけのドアに押し寄せる。一体が、ドアに腹部が挟まるのもものともせず、芋虫のように這い出てきた。その指先はぼくの足のすぐ近くの空気を闇雲に搔いている。ぼくは青ざめ、とっさにその不気味な白い顔を靴底で踏みつけるように蹴りつけて、扉の向こうへ押し戻した。一瞬テテはぐう、と蛙のような声を漏らしてひるんだが、一瞬で機敏さを取り戻し、両手をぼくの足に掛けようと空中を掻きだした。奴の目玉がぐるり、と一周し、ゆっくりとこちらに照準を合わせようとしている。ぼくは足をかき回すようにばたつかせ、その指先を交わしながら逆の足で手ごと化け物の顔をさらに踏みつける。テテの身体は石のように固くて重い。足が痙攣する、このままだと扉が開いてしまう。ぼくは歯を食いしばり、限界まで足に力を込めた。けど、テテは微動だにしない！ そればかりかテテは固い扉に片手を掛けて、力を込め始めた。まさか、このドアを体育館の扉のようにぐにゃぐにゃにするつもりなのか。

「トキ！」そのときヨーイチが横から滑り込んできて、テテの顔面を靴底で中に押し込んだ。バタン。

ガッチリと閉まった扉のすき間から、幾本かの黒い髪の毛がはみ出て風にそよいでいた。絶望の塊を抱え込んだまま電車は動き出す。車内のテテたちは整列して、ただ絵に描かれた何かのように微動だにせずこちらを見つめていた。ぼくはへたり込んだまま、恐怖が去っていくのを呆然と見送った。何かの悲鳴のように走り去った先で電車の車輪が高鳴りしても、虚しいくらいひっきりなしにぼくの呼吸音は鳴り続けていて、掻き消されることはなかった。

「大丈夫か？」ヨーイチは言った。

「ありがとう、ヨーイチ」ぼくはホームに横になって呼吸を整えた。「でも、あれだけのテテが居たってことは、地下も危険なんじゃないのかな」

やっぱりやつらは蝕陽炎が地下に届かないことを知っていて、先にチューブライナーを制圧しようとしているんだ。

「幸いここは9437番地。サイエンスのところまではあと一駅だ」そう言ってヨーイチは立ち上がる。「歩こう。その方がまだ安全だ」

そしてぼくたちは線路に降り、歩き出した。

ホームの端が過ぎるとたちまち壁はじめじめした汚らしいものになる。初めはテテがどこから現れるのではないかと不安だったが、地下道は至って静かだった。多分、奴らも電車で移動しているだけでここにはまだ居ないに違いない。

「あいつら、汚いものが嫌いなものかもしれないね」とぼくは言った。あの白い陶器のような姿に、この汚らしい場所はどこか不似合いだった。

風の音と、何かの雫が落ちる反響音以外、何も聞こえない。静けさの中、ぼくたちはただ遙か彼方に拡がる巨大な闇の塊に引かれるように歩いていた。等間隔で蛍光灯が配置されていて、それがぼくたちの身体を浮かび上がらせたり影にしたり、点滅させていた。それはライブ中のスポットライトを連想させる。四方八方から交互にライトを浴びせられたヨーイチとイツキ。真剣な眼差しを影が隠したり、照らしたり。セッションをしているときも、3人で遊んでいるときも、今考えると本当に楽しい日々だった。失われてしまったからそう思うのかもしれない。けれど、平和だった頃は、平和なことが当たり前すぎて、それに気付かなかった。そしてまさかこんなことになるなんて想像もしなかった。もしかしたら、ぼくたち3人の関係は、いつまでも続かないものだったのか、こうして終わりが来て当然だったのか――。

暫く歩いていると、どこからか人の話し声が聞こえた。ぼくは一瞬身構えたが、それは線路脇に落ちた、ピンクのポータブルラジオだった。ひび割れた声でそれはニュースを告げている。『蝕陽炎は偏西風の影響で遠のいたものの、依然として東の空に立ち込めています。町の中にはかなりの数のテテが潜伏をし始めています。皆さん、白い人を見かけたら無闇に近づかず……』そこで音声が乱れる。別の男の声『番組収録中だ、君たち何を』『ひっ』『まさか、これがテテ――ザー……』

ぼくはラジオに歩み寄った。そしていきなりそのピンク色のボディをカ一杯蹴飛ばした。ラジオは壁にぶつかって粉々に砕け散り、そのまま沈黙した。

「ぼくが何をしたんだ、イツキが、一体何をしたっていうんだ。なんだって、こんなことに――」なぜイツキが消えなくちゃいけないんだ。ぼくらが何をしたっていうんだ。あいつらの手の先は、相手がどんな人間だろうと関係なく消し去っていく。きっと、どんなに偉大な人物だろうと、どんなに有能な人物だろうと、何十人という人間を殺した悪人だろうと腐った蜜柑のような人間だろうと、あらゆる人間の上に平等に悪夢を落とす。無差別、それが平等なのか？

「くそっ」ぼくはこのとき、やつらと闘うことを心に決めた。

そのときヨーイチがぼくの名を呼んだ。「トキ」彼は何かを悟ったような目でぼくを見つめていた。「トキ、お前もイツキのこと、好きだったんだろ？」

ぼくはぎょっとして彼の顔を見た。

A photograph of a weathered metal surface, possibly a door or panel, showing significant rust and peeling paint. The surface is light-colored with dark brown and black spots of corrosion. A vertical seam or joint runs down the center. A large, bold black number '5' is superimposed in the middle of the image.

5

ぼくは一瞬耳を疑った。まさかそんなことを言われるとは思いませんでした。ヨーイチに気づかされているとも思わなかったし、彼がそういうことを口にする人間だとも、思わなかった。

「どうしてそんなこと……」

「前々から気がついてたんだ。お前がイツキに熱を上げていることと、オレに対する気遣いと、両方にな。それで、いつも悪いなって思ってた」

「なんだって」

「お前、結構分かりやすんだぜ。もちろん、付き合いが長いからかもしれないけど」そう言ってヨーイチはアヒルみたいな笑い方をした。眼鏡の奥で眼がきらめいた。「だからオレもお前に遠慮して……別にオレがイツキをうまく愛せなかったことをお前のせいにするわけじゃないけど、気を取られてた部分はあるんだ」

ぼくはこういうとき、何と答えたらいいのかわからない。「……何が言いたいんだ？」

ヨーイチの表情が急にきつくなる。「良いか、今回の件で本当に頭に来てるのはオレなんだよ。イツキはオレの女だ。あいつのことを好きだろうがなんだろうが、オレの前でそういう姿を見せるのはやめてくれないか？」

「なんだって……」ぼくは奥歯を噛みしめた。「ちょっと待てよ。ぼくだってイツキが死んで哀しいんだよ、どうして哀しんじゃいけないんだよ。だいいち、ぼくはじゅうぶん今まで気を遣ってきたつもりだよ。君にイツキのことは任せたつもりで居たんだよ。なのに……なのにイツキのことを救えなかったのはお前じゃないか！ ドラムセットの中で指くわえて見てたじゃないかよ！」

「お前が本当にイツキのことが好きだったなら、オレに遠慮なんかせずにあいつのこと守れば良かったら」ヨーイチは暗い目でぼくをにらみ付けた。「それとも単に守れないだけか？ え？ 何のためにオレがお前のことまで守ってんだよ、何のためにお前はオレに守られて両手を空かせているんだよ。考えたことあるか？ え？ お前な、気を遣ってたとかなんとか言うけど、気を遣ってたのはオレとイツキの方なんだよ。オレとイツキはもっと親密な仲になりたかったのに、お前が一人だけ余っちゃうからセーブしてたんだよ。オレはどのような状況でも三人でやっていきたいから、イツキにのめり込みすぎないようにしてきたんだよ。お前にこの苦しみが分かるか？ え？」

「嘘だ！ ぼくたち三人の関係を壊したくなかったのはこっちの方だ！」

だが、ヨーイチはそれを無視して彼の言葉を続けた。「オレはできることならイツキのことを守りたかった。なのにこうして助けてるのはお前だよ。別にそれでも構わない、お前だってオレにとって大切な仲間には変わらないんだから。オレはイツキだけじゃなくてお前のことも助けてやんなきゃいけないんだよ。そのせいでイツキを取りこぼしちまったんだよ。なのに、なんで助けてやったお前からそのことをとやかく言われなきゃいけないんだよ。お前に何の義理があるんだよ？ え？ オレには何度も命助けられてんだろ？ イツキとは付き合ってもいない、ただのバンド仲間だろ？」

「ただの……」ぼくは急に頭が熱くなった。蝕陽炎とテテに対する行き場のない怒りもあって、本当にどうしようもなくなって、気がつくともヨーイチに掴みかかって一発頬をぶん殴っていた。細い眼鏡が飛び、水たまりに落ちる。ぼくは叫んだ。「ふざけんなよ！ ヨーイチは確かに頭も良いし運動神経も良いよ、そりゃあ。ぼくだって尊敬してたしさ。でも、一度に二人の人



間を守れるみたいなのはただの思い上がりだろ！ そんなんだからイツキを守れなかったんだろ！ お前のせいだろ！ ぼくのことは別に助けてくれなくたっていいんだよ！」

警笛が鳴り、震動と轟音。そしてぼくとヨーイチの影を浮き上がらせるまばゆい光。壁際にヨーイチを押さえつけているぼくの背後を列車がものすごい勢いで通過する。

「ヨーイチはイツキを手に入れて失った、だから寂しいかもしれない。けれど、ぼくは手に入れることなく、もう永遠にその可能性を失ってしまったんだ。君こそ、この気持ちが分かるか？」

ヨーイチは無言のままぼくの腹に膝蹴りを入れた。鋭い一撃に呼吸ができなくなって、ぼくはその場にへたり込んだ。

「オレはお前が思ってる以上にイツキが死んでショックを受けているんだよ。でも、お前のことを守るためには、そんなものに打ちひしがれている暇なんか無いんだよ。だから押し殺してるんだよ。オレには、お前のことだって大切なんだ。イツキと出会うずっと前から一緒だったお前のことだって」

ぼくは、悔しくて涙が出てきた。子供の頃から、ぼくはいじめられるたびにヨーイチに助けられてきた。でもぼくは、一度として自分の手で何かを守れたことはない。いつも守ってもらうばかりで、何一つ。でも、それだってぼくが弱かっただけじゃない。ヨーイチに、花を持たせてやりたかったからなのに。ぼくと彼の関係を壊さずにいたかっただけなのに。それがぼくの幸せ、だったのに。

ぼくはいつでもヨーイチに守られ、引っ張られて生きていた。音楽をやり始めたのも、服装を気にするようになったのも、彼に付き合っただラッグを買いに行ったのも。未知の世界へ領域を拡大するときは常に彼の存在があった。彼がぼくを新しい世界にいつも連れて行き、必ず臆病なぼくがそこに根を張るまで守り続けてくれたんだ。イツキが、ぼくより、ヨーイチを選ぶのは当たり前か……。

「立てよ、悪かったな」ヨーイチはそう言って手を差し出した。「確かにオレは自分の力を買い被りすぎていたかもしれない。昔から、お前のことを弟みたいに思ってきたから、その名残なんだと思う。いつまでも子供扱いして悪かった。こんなくだらないことで喧嘩するのは、やめようぜ。言い争ったって、イツキが生き返るわけじゃない。それに、大声出すとテテに嗅ぎつけられるかもしれないだろ」

ぼくはヨーイチをずっと見つめていた。結局、悪いのは彼じゃなかった。ぼくなんだ。何もできないくせに、心地良い自分の世界ばかり守ろうとして、強い奴が闘ってるのをじれったく見守っているだけの、ぼくなんだ。

彼はぼくの手を掴み、引き起こした。

「もしも生き延びたらさ」ぼくは小さな声でつぶやいた。「そのときはぼくのことなんか気にせずに生きてよ。ぼくも、なんか情けないんだ、ぼくのせいで、ヨーイチが自由に生きられないって思うと」

ヨーイチは首を振る。「大丈夫だよ、オレを縛り付けてるのはお前だけじゃない」彼はため息を吐いて眼鏡を拾い、シャツの裾で拭いてから掛けた。「だからこの町を出たいんだ」

やがて前方にホームらしき白い光が見えた。ヨーイチはぼくに待機を命じ、一人で先に様子を伺いに行き、テテらしき存在がないことを確認して手招きをした。ぼくたちはホームに這い上がり、無人の改札を抜けて地上に出た。

そこでぼくが眼にしたのは、テテの群だった。奴らはぼくとヨーイチが地上に出るなりいっせいにフクロウのように頭だけを回してこっちを見た。その数、数百体。奴らは道路をわがもの顔で行き交い、建物によじ登っていた。普通の人間はほとんど居ない。居ても地面に仰向けに倒れながら煙を上げて消えている最中だった。

偏西風で、蝕陽炎の雲とゆらゆらは食い止められていたものの、事態はむしろ深刻化していたんだ。

「何だよ……これ……。これじゃあ助かる方法をサイエンスの爺さんに聞くより前にくたばっちゃう」

ぼくが弱音を吐いたとき、ヨーイチが不意にテテに向かって走っていったんだ。そのテテはバイクにまたがった青年の額に触れて消している最中だった。彼は思いきり地面を蹴り、テテの胴体が強靭なドロップキックをたたき込む。テテは一回転して吹っ飛び、青年は地面に倒れて砂のように砕け散る。他のテテたちがヨーイチに群がってきたが、彼は一切動じない。倒れかけたバイクに素早くまたがりギロチンのようにキックしてエンジンを掛けるなり、ウイリーする勢いで車体を発進させた。

「トキ、乗れ！」

ぼくは頷き彼の後ろに飛び乗った。すぐ後ろで、テテが何事もなかったようにゆっくりと起きあがり、あの恐ろしい指先をぼくたちの方へ伸ばす。他のテテたちもいっせいに襲いかかってきた。ヨーイチは大胆にハンドルを切り、車体を寝かせてほとんど横滑りするようにして側面からのテテを交わし、前方のテテを蹴散らした。軌道を逸れたテテの指先は逃げ遅れて立っていた若い女をこの世から掻き消した。

気付けば、喫茶店、病院、ブティック、映画館、バスの中、ビルの窓一つ一つまでもがテテに埋め尽くされていた。まるでホラーハウスの絵画や彫刻のように、奴らはそこかしこからぼくたちをじっと見つめていた。奴らの不気味な視線を感じるだけで、ぼくは怯え、ヨーイチの背中にしがみついた。バツタのようなオフロードバイクは次第に加速度を増していく。

「ずいぶん町の間が滅んだ気がする」ぼくは暗い声でつぶやいた。

「こんな町のことなんか気にするな。いつかは捨てなきゃ行けない町だ。それよりオレはサイエンスが心配だ」

まただ。どうしてヨーイチはこんなに憎しみを抱くのだろう。何かを考えているのか、わからなくなってくる。

「ねえ、ヨーイチはこの町に何か恨みでもあるの？」

「ないよ。ただ、これが町という集合体の本来あるべき姿じゃない。そう思ってるだけだ。こんな外の情報を一切開示しない町……」

「だからこの有様が外の世界の正体なんだよ。どうして分からないの？」

ヨーイチは舌打ちをして、いっそうアクセルスロットルを捻っていった。まださっきのことを引きずっているのか、機嫌が悪い。いや、引きずっているのはぼくの方か――。

「この町は、あんなテテや蝕陽炎にどうかされなくても、そのままでいつかは滅びる、それくらいぼくにも分かるんだよ」とぼくは言った。国交を断たれ、経済は既に飽和、失業者が溢れ、

親は子に残す保険金を目当てに自殺するも、保険会社は既に倒産を始めている。増えない限られた金を使い切るだけの、砂時計のような世界。「だからヨーイチのように、都会だの外の世界だのに夢を抱くのは別に構わないと思う。でも、だからって、この町が自然と崩壊することも待たず、いきなりどこの誰だかわかんないやつらにぶち壊されるのを、指をくわえて見てられるかよ。みんな死んでるんだぜ？ どこの誰にそんなことをする権利があるんだよー」

ヨーイチはきつとわざと思いきりアクセルを捻った。バイクがホップして、ぼくは舌を噛んで黙り込んだ。

ドクターサイエンスの家は本当に町の外れにあった。ちょっとした草っ原にある、ほったて小屋ともガレージともつかない小さな建物。ヨーイチはそのすぐ脇にバイクを停めた。市街地から少し離れているため、テテの姿は見あたらない。テテは、ヨーイチが言ったように戦略的で、とても効率的なんだ、人口密度の高い場所に集まるに違いない。

ペンキに汚れた木の引き戸をノックしてヨーイチは「爺さん」と呼んだ。

「ヨーイチか」中からサイエンスの声がする。そして扉が開く。水中めがねのような眼鏡を掛けたサイエンス翁が、顎から生えた白髭と同じくらい黄ばんだ白衣を着て立っていた。「よく来たな。無事で何よりだ。おお、トキも一緒か。さあ、テテに見つかる前に中へ」そう言って彼はぼくたちを招き入れ、扉を閉めた。

ヨーイチはどうか知らないけど、ぼくが彼の家に上がるのは初めてだった。そこはほとんど倉庫のようになっていて、わけの分からない薬品の瓶やドラム缶や金属パーツがうず高く積み上げられていた。ぼくらは脇にある頑丈そうな金網の階段から、地下室に通された。そこは天井の低い平方メートルほどの部屋で、むき出しのコンクリートに茶ばんだ凶面のようなものが無数に貼り付けられていた。

サイエンスは身軽に回転椅子に飛び乗って、スチールデスクに足を投げ出し酒瓶を引っかけた。「町はどうだね？」

「どうって、もうテテだらけだよ」ヨーイチは言った。

「そうだろうな」サイエンスはそう言ってしかめた。その顔は、水中めがねのような老眼鏡を外せばどこかチンパンジーにも似ている気がする。でもこの爺さんも異常なほど頭が良い。

「そうだろうな、って……」

「わしとて戦争経験者だが、奴らの正体についてそれほど詳しく知っていたわけではない。何せ戦場に居たわけではなく、爆薬やら薬品やらを開発する部隊で、山奥の洞窟で実験をしていただけだからな。もちろん、蝕陽炎やテテっていう存在を噂で聞いたことはあったが、この目で見たわけじゃないんだよ。大佐命令で、万が一テテが侵入してきたら、目を見るな、絶対に触られるな、ほとんどそう聞かされていたくらいのもんだ。但し、終戦間際になって、一度だけ、テテのデータを解析する任務に就いたことがあった」

サイエンスはコンピュータの画面を立ち上げ、ぼくたちに見せた。そこには緑とオレンジ、二つの心電図のような波状グラフが縦に並んでいた。

「これは？」

「そのときの研究データだ。上がテテの指先のパルス信号で、下は亜空間バレーのパルス信号。それぞれのパターンをステルス解析したものだ」サイエンスはそう説明しながら、キーボードを

パチパチと叩いた。二つのグラフが徐々に中央に引き寄せられてゆき、ぴたりと重なる。同じだった。波線までぴたりと一致していたのだ。「テテの指先の原理は、この町を孤立させている次元の揺らぎ、即ち亜空間バレーと全く同じものだ」

そうか、だから体育館や電車の扉をぐにゃぐにゃにすることができたのか。

「それじゃあ……」

サイエンスは頷いた。「恐らく、テテも蝕陽炎の雲も、亜空間バレーから発生しているということだ。あるいはその谷の向こうから」

「次元の谷の向こうから」ヨーチは目を細めてため息を吐いた。「やはり」

ヨーチが予測した通りか。この町の外、つまり亜空間バレーの向こうには高度に発展した別の世界があり、そこからテテというゲリラ部隊と蝕陽炎という毒ガスが送り込まれてきているのか――。

「誤解するな。あくまで元々はそうだった、という話だ」

「じゃあいまは違うっていうのか？」

「さあな。君たち、テテが人を消すところは見たことがあるか？」サイエンスはコンピュータの電源を切りながら尋ねてきた。

ぼくはヨーチの代わりに、「ええ、目の前で何度か」と答える。

「じゃあ、そのあとは？」

「そのあと？」

サイエンスはデスクの引き出しからビデオテープを取り出し、デッキに押し込んだ。「わしは、イツキちゃんが消えて以来、ここで各エリアの監視カメラを通して奴らの動きを追っていた。それで、突き止めたことが一つだけある」

「ほう」ヨーチは壁にもたれ、煙草を一本くわえて火を付けた。「爺さんの研究も、ちょっとは世の中のためになりそうじゃないか」

「茶化すな」サイエンスはリモコンを操作して、モニターの電源を入れた。「奴らの能力と正体について説明するには、この映像を見てもらうのが一番手っ取り早い」

15ある画面のうち一つに、二階くらいの高さから定点観測された、街角のモノクロ映像が映し出される。そこは石畳の歩道で、花屋の前。人がまばらに往来していた。時折車が過ぎる。野良猫が横切る。どこにでもある光景だ。サイエンスはテープを早送りにした。往来が途切れ、突然逃げまどう人々が映し出された。その中に、画面の端からゆっくりと入り込んでくるテテの姿。真っ白い、光を放つほど真っ白い化け物は、鉢合わせた若い男の顔を手で掴む。映像が一瞬乱れる、男が光る煙を上げながら蒸発するように消え、画面内はただ虚しく手をかざしているテテだけになる。

「ここからだ」とサイエンスはしわがれた声で説明する。と、そのとき、散らばっていた彼の灰が、どこからともなく集まってきて、またたく間に白い塊になったかと思うと、一瞬のうちに膝を抱えて丸まった人の形になり、大きく伸びをするように両手両足を解いて地面に立った。テテが二体、向かい合って立ち尽くす。

ヨーチの口から、くわえていた煙草が落ちる。「これは」

テテだった。どこからともなく集まってきた灰が白い球体を作り、そこからテテが生まれたんだ。

サイエンスは無言で全モニターにそれぞれ別の街角を移しだした。画面の中で、人々が次々にテテに消されてゆき、そしてそこから続々と新たなテテが誕生していった。

「テテにやられた奴が、テテになっていく――」ぼくは呆然とつぶやいた。「そんな馬鹿な、あの化け物が、町の人たちだっていうのか」

博士はリモコンを操作した。全てのモニターがいっせいに一時停止状態になる。「そうだ。テテに消された人間は、一度死ぬ。しかしその場でテテとして生まれ変わるのだよ。つまり――」

「つまり、イツキは生きている」そう、ヨーイチはそうつぶやいた。

彼の後ろに、一つだけ、テテが一体しか映っていないモニターがあった。全てモニターは一時停止させられているはずなのに、そのモニターだけは、テテがまるで生きているかのように一瞬動いたような、そんな不吉な錯覚を覚えた。



6

その晩、ヨーイチとぼくはサイエンスの部屋に泊まることにした。ここは町の騒乱が嘘のように静かだけど、たびたび遠くの方で地響きがして、地震のように部屋が揺れることがあった。

サイエンスのモニターのうち、二基が突如映らなくなった。そして残りのモニターのうち町の全景を写した暗視カメラが、東側のいくつかのビルとイツキたちの墓がある共同墓地が蜃気楼のように揺れながら、バラバラに崩壊していく瞬間を捉えていた。宙に投げ出されて灰になる、墓石と、誰かの供えた可憐な花束。それは、指をくわえてみているには、あまりにもつらい映像だった。

吹き戻された蝕陽炎が、再び近づいてこようとしている。

ヨーイチとサイエンスが寝静まった頃、ぼくは簡易ベッドを抜け出した。こんなオイルとホルマリンの臭いが充満した部屋で寝ているわけにはいかなかった。ぼくにはどうしても確かめたいことがあったんだ。それでそっとガレージの扉を開けて、外に誰も居ないことを確認し、バイクにまたがった。

空には嘘みたいに綺麗な星空が広がっていた。でも東側は星雲を封じ込めるほどどす黒いガスが広がっていた。

ズン...ズズズズズズ.....低く遠くで雷鳴のような轟きがする。東の彼方でランドマークビルの本が揺らぎ、そして崩壊するのが見えた。ただ、幸い、深夜はテテも寝静まっているのか、バイクを走らせている限り、白い人影も生きた人間の姿にも出逢わなかった。不気味なほど町は静かだった。

テテに触れられた者は一度死に、そしてテテとして甦る。そんなドラキュラかゾンビのような話があり得るのか。でも、だとしたらこの町にこれほどテテの数が増えたのも頷ける。死ぬのではなく、テテとして甦る。町の人たちが、どんどんそうやって侵略者に洗脳され、この町を滅ぼす敵になる。

ぼくは、ゴーグルの奥で目を細めた。だったらなおさら、ぼくはテテにやられるわけにはいかない。ここがどんなにひどい町でも、ぼくはここを見捨てたくはない。思い出がたくさん詰まった場所だし、ぼくも、ぼくが愛したイツキも、この町で生まれ育った人間だ。どこまで行ってもぼくたちはこの町から逃れられないんだ。

「戦争はもう終わったのに、どうしてこの町が狙われてるの？」夕べ、ビデオを見終わったあと、ぼくはサイエンスにそう聞いた。

「良いか、テテは何も突然湧いて出たわけではないのだよ」彼はビデオの電源を落としながらそう答えた。「以前からテテはこの町の中に潜んでおった。戦争のあと、移民どもに紛れてな。あるいはそれ以外のときも随時出入りしていたのかもしれない。あの亜空間バレーから。だがな、テテがいくらこの町に潜伏していようとも、少数なら本来何もできんはずだった。なぜなら奴ら、ただ居るだけでは何もできない、誰かから“見つけて”もらわなければ、テテとして存在することすらできない生き物だからだ」

「どういうこと？」

「奴らは存在感を吸う生き物だ」

「存在感を吸う？」

「そうだ。人間の注意を引き、発見されることで、テテは実体化する。そうなってはじめて驚異となる。奴らは実体を伴ったその腕で、発見者から、存在感を吸収しているのだ。だから触れられた人間は消え、その残りカスから新たなテテが生まれるんだよ」

「そんなことが……」

「亜空間バレーの中で生まれたからこそ、人間には越えることのできない歪んだ次元を自在に行き来することができるのだが、その身体もまた歪んだ次元でできている。だから触れた相手をかき消せる」

「そんな奴らが潜伏してたっていうのなら、どうして今まで何も起きなかったんだ？」

「次元が違うために、存在感を吸い、この町にチャンネルを合わせねば、奴らは存在することができんのだ。わしらには、わしらの次元の生き物しか見えん。そして見えんものは存在しないことになる。靈感がない人間が幽霊を見ることができんものと同じにな。誰もテテに気付かなかつたら、何事も起きなかつたらう。誰かが気づいてしまったから、やつらはこんなに急に増殖したのだよ。戦時中のように」

「つまり、今回、ぼくたちのコンサートの一件が原因だっていうのか？」

「そうだ。もっと言えば、真っ先に消滅させられたイツキちゃんがテテの存在に気付かなければ、何も起きなかつた」

「イツキのせいだと？」ヨーチが目を細める。

「そうは言うておらん。何者かが気づかせるよう仕向けなければ、あの子とてテテを見出すことなどできなかつたはずだ。つまり今回のことは何者かによって仕組まれた」

イツキが今さらになってテテを見つけてしまったのは……でもそんなはずは――。

「*I am a bird that is wishing to fly away far away.fly away far away.fly away far away. However, wherever I go, I will recall the home....um.....fly away far away.....*」

ぼくはイツキの歌い方を真似ながら、バイクのスロットルを捻り、メインストリートを駆け抜けた。

イツキの愛したマンモス建築の影の向こうでは、東の端の建物たちがゆっくり滑り落ちるように崩壊し始めていた。ぼくは急いでイツキの住んでいた棟へと向かった。建物は、以前に来たときと比べてなんだか至るところがくたびれて、急に老け込んだように感じられた。天真爛漫なイツキを失ってつらいのは、この建物も同じか。ぼくは階段を駆け上がった。そしてイツキの部屋へ。

ドアを開けると、部屋の中をからっぽであることを示すかのように風が吹き抜け、薄明かりの差し込む窓際でカーテンがふわりと揺れた。

そこは何も変わらぬままあらゆるものが残されていた。彼女の服もライブで使わなかった方のエレクトリックギターも何もかも。そしてたった一つしかないマグカップも流しに置き去りにされたまま、蛇口から滴る水が波紋を広げている。ぼくは彼女が好きだと言っていた梁に手で触れながら、“あるもの”を探した。あの日のままならば、一枚の封筒が封を切られない状態のままテーブルの上に置かれているはずだ。即ち、あの伝書鳩が届けた、彼女の母親を名乗る何者からかの手紙――。



そこには確かに封筒が置いてあった。だが、それはからっぽの封筒で、中身は誰かに持ち去られていた。「イツキ……」

あの日、彼女はこの手紙を手取るなり、「たちの悪いイタズラね」と言い、封を切らずにここに置いた。彼女は、あのとき何だか煮え切らない表情をしていたけれど、やっぱり気にしていたんだ。ぼくが帰ったあと、一人でこっそり中身に眼を通したに違いない。

ぼくの考えるとおりなら、あの手紙はイタズラなんかじゃなかった。正真正銘、彼女の死んだ母親から来た手紙だったんだ。但し、それは彼女の知る母親ではない。イツキの両親は、テテに殺され、そのあと例によってテテとして生まれ変わり、母親のフリをして、娘に宛てて手紙を書いたんだ。あの手紙には恐らく、母親がライブを見に行くことが書かれていたのだろう。何時くらいから会場に入り、だいたいどのあたりに席を確保する、といった厳密な話をあらかじめ伝え、イツキの注意を引こうとしたんだ。イツキが彼女の母親を、つまりテテを、“見つけやすい”ように。

テテは群れをなしてこの町の人々を襲うために、まずは誰かに認められ、実体化する必要があった。イツキは、それにまんまと利用されたんだ。

テテになった時点で、母親の心はもう無くなっている。きっと身体だけが、テテの材料として使われているに過ぎないだろう。だからこんな冷血な真似ができる――。

そのとき不意にどこから男の叫び声が聞こえた。「畜生、なぜだ、なぜうまくいかない！」ぼくは思わず肩をすくめた。この団地の、生き残りの人？

「畜生、なぜテテが！」声は廊下の方、すぐ近く、少なからず同じ棟から響いてくる。

駄目だ、あんな大声を出したらテテに見つかってしまう。ぼくは部屋を飛び出そうとした。が――。

突然、音もなく玄関のドアが開いた。視界の隅に、スーッと、音もなく白い影が入り込んでくる。

顔の半分が影の暗闇に埋もれたまま、それは何を言うわけでもなく、骸骨のような無表情な顔でこちらをじっと見つめている。テテだ。ぼくは驚きのあまり飛び退いた。大きな白目が回転し、瞳孔だけの眼がこちらを睨む。

次元が違う生き物、そういうサイエンスの言葉を思い出すと、冷や汗が額ににじんだ。

「あんたも元はこの町の間人じゃないのか？ こんなことをして――」

テテたちは表情一つ変えない。耳を貸す気配もなく、冷酷に一步、にじり寄ってくる。やっぱり人間の頃のことなんてわからないんだ、もう完全に異次元に魂を売ってしまったんだ。ぼくは固唾を呑んだ。それともこいつは亜空間か外の世界で生まれたオリジナルのテテなのか？

危険だとは思っていたけど、まさかこんな逃げ場のないところでテテに遭遇するとは思わなかった。こんなことならヨーイチを連れてくるべきだった。でも、そうすれば察しのいい彼は、ぼくが彼に秘密でここへ来たことがあるってことに気づき、逆上しただろう。チューブであんなことがあったばかりなんだから。それに、ここでぼくの知ったあの手紙は、ぼくとイツキの間だけの秘密だった――。

テテはゆっくりと部屋の中に入ってくる。ぼくはその瞳孔だけの瞳を見ないようにしつつ、後退する。狭いこの部屋に逃げ場なんかない。唯一の脱出経路は、テテが入ってきた、あの開け放

たれたままの玄関くらいのもの。うまく引きつけて、回り込めばあそこから出られるかもしれない。

「来いよ」ぼくは大胆にステップして、テーブルの後ろに回り込んだ。テテはぼくが後ずさったのと同じだけ近づいてきて、ぼくとテーブルを挟んで向かい合った。身体を左に揺らす、テテは右に揺れる、玄関は開け放たれたまま、今なら逃げ出せる――。

そう思ったときだった、その誰もいないはずの玄関から、ものすごく襟の高い黒服を着たスキンヘッドの男がぬーっとこの部屋に入ってきて、唯一の逃げ道を塞いでしまった。馬鹿、邪魔だ、なんてとろい奴なんだ。その男はテテを見ても動じないばかりか、むしろこちらをほとんど睨むような敵意ある眼で見つめていた。ぼくは怪訝した。

なぜテテに襲われない、まさか、この男はテテの仲間なのか？

A photograph of a heavily rusted metal surface, possibly a piece of machinery or a structural component. The metal is light-colored, likely aluminum or steel, and is covered in extensive brown and orange rust. There are several dark, irregular spots and streaks of rust, particularly along the edges and in the center. A large, bold black number '7' is overlaid in the center of the image. The background is a plain, light-colored surface.

「ここで何をしていた？」黒服の男は低い声でそう訊いた。その声からして、どうやらさっき聞こえた声の主はこいつのようだった。

「何をもって……」

なぜかその目はぼくを非難するような威圧感に満ちている。何なんだ？

「何を」男がもう一度繰り返そうとしたとき、その背後で木の椅子が高らかに持ち上がり、スキンヘッドめがけて鋭く振り下ろされた。アンティークチェアはバラバラになり、男は身体をくの字に曲げてよろめいた。誰だ？ ヨーイチ？

「大丈夫ですか？」そう言って部屋の中に入ってきたのは、ぼくより少し年上くらいの、屈強な青年だった。恐らくこの団地の住民で、テテと戦おうとしている勇敢な人なのだろう。「その黒い服の奴も敵です。今のうちに、さあ、逃げましょう」と彼は言い、こちらに手を差し伸べるようにした。

ぼくは「ありがとう」と言って、テテに向かって思いっきりテーブルをひっくり返した。そして奴らが驚いている隙に玄関の方へ向かう。「敵だって？ あの男は一体何者なんだ？」

「こいつらは――」と青年が言いかけたそのときだった。テテはぼくがひっくり返したテーブルに少しも物怖じせずかわすと、その勢いのまま青年に飛びかかり、汗のにじんだ顔を大きな手でわしづかみにしていたんだ。

「ヒッ」青年の大きな身体はテテのか細い腕で易々と持ち上げられる。宙に浮いたスプーンやテーブルクロスが、ぼくと彼との間にゆっくりと落ちていく。青年の身体はみるみるうちに透明になり、そして消えていった。そして完全に見えなくなったかと思うと、サイエンスのVTR通り、どこかから光が集まってきて青年の居たところにもう一体のテテが誕生した。

「ねえ、おい」ぼくは青年の代わりに現れたテテに呼びかける。でもその声はやはり届いていないようだった。二体になったテテは、次はお前だとばかりに同時にぼくの方を向く。もう助けてくれた青年の面影なんて無かった。本当に一瞬で何もかもが変わってしまうんだな。本当に町の人間だったときの記憶なんて無いんだな。敵に魂を乗っ取られてしまっているんだな……。もともと、この町に、知り合いでもない他人同士が互いを思いやるような風土なんて、もともと存在しなかったのかもしれないけれど。

「イツキ……」ぼくは唇を噛んだ。人間がテテになったら、もうそれまでだ。もしイツキがテテとして生まれ変わっていようとも、もうイツキと呼べる人間は存在しない。彼女は死に、その身体が殺人兵器の素体に利用されているだけなんだ。なんてむごいことを。

黒服の男も何事もなかったかのように起き上がった。服に付いたほこりを払いながら、冷酷に玄関を塞ぐ。一体この男は何者なんだ……。青年は何かを知っているようだった。一体何と言いかけていたのだろうか？ だが、そんなことを考えている隙もなく、二体のテテがぼくをゆっくりと釘付けにして、逃げ場を塞ぐように並んだまま、確実にこちらに迫ってきた。くそ、このままでは……。

ぼくは脇にあったエレクトリックギターをひっ掴み、目の前のテテめがけて思いっきり振り下ろした。バーン、という音とともに、手に振動、ギターが次々と切れ、身をよじる蛇のように宙にはじける。ネックが折れ、テテは倒れる。「ごめんよ、イツキ」粉々になったギターに向かい、ぼくはそうつぶやいた。

でも、息つく間なんて無かった。玄関からはまた新たなテテが現れて、倒れたテテをまたぎ、

こちらに歩み寄ってくる。その背後から、また新たなテテ、テテ、テテ。細胞分裂のようにどんどん増えていく。この団地の人たちはもうほとんどがテテに変えられてしまったのか。イツキの愛した、この団地まで奪うのか。ギターでぶん殴ったテテも、ゾンビのように起きあがる。テテは10体ほどになり、むっくりと身体を起こしてこちらを向いた。その間をかき分けるようにして、黒服のスキンヘッドが前に歩み出た。

黒服は数体のテテを順番に見て、その頬を静かに撫でた。どうしてこの男はテテに襲われない？ さっき消えてしまった青年は、こいつも敵だと言っていた。そうか、テテ送り込んでいるのは、この男か。この男が外の世界から来た侵略者の親玉ってことか――。

そういえば、昔ヤンキーに絡まれたとき、ヨーイチは雑魚に構わずリーダー格に猛進していき、そいつの首を絞めて気絶させたんだった。

「畜生！」ぼくは鉄パイプでできたギタースタンドを引つつかみ、黒服めがけて突っ込んでいった。盾になるようにテテが立ちはだかる。ゆっくりと伸びてくる白い手。ぼくはそいつらを鉄パイプでなぎ払う。そして黒服に向かって一撃を加えようとした、そのときだった。

「このテテもまた不完全体か」黒服はそうぼつりとつぶやいた。

不完全？ その言葉に気を取られたか、思いっきり振り下ろしたはずの鉄パイプは、やすやすと黒服の片手に受け止められ、キーン、という音とともに折れて飛んでいった。くるくると回りながら飛んでいったパイプの先端は、離れたところに立っていた一体のテテの顎に偶然命中した。テテは倒れる。

「中途半端に異次元化して」黒服は身をひるがえしながら言う。「この町は土が腐った農園か。一体としてまともにテテが育たない」

冗談じゃない。不完全だろうと何だろうと、ぼくが窮地に立たされていることにはかわりはない。気付けばこの部屋に入りきらないほどの白い群がぼくを追いつめていた。

だいいち、体育館でぼくたちを襲ったやつらも、チューブライナーの中にいた群れも、こいつらみんな不完全だって言うのか。それなのにぼくはこんなに命からがらで。もしも完全な力を持ったテテがこの町を埋め尽くしたら、一体どうなってしまうんだ。

膨大な数のテテは津波のようにいっせいに飛びかかってきた。

「まずい」ぼくはとっさに背後の窓ガラスを突き破って外に飛び出した。だが、ガラスの破片と共に空中に投げ出されてはじめてここが地上三階だということに気がついた。もう何もかもが遅かった。真っ逆さまに落ちていく――。

あの日イツキは、そもそもぼくを呼び出して、一体何を言おうとしていたんだらう。話があるから、と彼女は言っていた。その話とは、何だったんだらう。彼女の両親の死んだ話以外に、何かあったんじゃないのか？

ココアの残りを飲み干した後、彼女は別の部屋に籠もってエレクトリックギターのチューニングをし始めた。それでぼくは暇をもてあますため、ソファに横になった。そのあと睡魔に負けてぼくが見た夢は――ぼくの唇に何かに触れたような気がして目を覚ますという内容だった――ただの夢だったのだろうか。まぶたを開けたとき、目の前には、霞んだイツキの顔があったような気がする。そして彼女は静かに元の部屋に戻っていったような気がする。あれが夢ではなく、現実にあった出来事だったとしたら。あれが夢でなかったのなら――脳裏でイツキが微笑む、少

しだけ彫りの深い大きな眼を微かに細め、そして淡い色をした唇で――ぼくはそれだけで、幸せだ――。

ものすごい音とともに、ぼくは地面に叩きつけられた。遅れて全身をしびれるような痛みが駆け抜ける。でも、その激痛は一瞬で通り過ぎた。眼を開けると、すぐ脇に大きくひしゃげた看板が転がっていて、割れたランプがパチパチと音を立てていた。体じゅうを確かめてみる、ところどころ痛みはあったものの、幸いどこの骨も折れてはいなさそうだ。助かった、あの歯医者さんの看板がクッションになったんだな。

テテと黒ずくめのスキンヘッドは幸いまだこっちに降りてきてはいなかった。ぼくは急いで立ち上がると、バイクにまたがり団地を後にした。振り返ると、排気ガスのスモークの向こうに二つの佇む影が見えた。

ドクターサイエンスの小屋に帰り着くと、彼はもう起きていた。

彼はぼくが扉を開けるなり、「どこに行っていたんだ？」と出迎えるように尋ねた。

「ちょっとね」ぼくは眼を細め、ヨーイチがまだ起きていないことを祈った。

「ちょっとって、怪我しとるじゃないか」

ぼくはそれには答えず、「ヨーイチは？」と訊いた。彼は起きていないどころか、ガレージのどこを見渡しても姿が亡かったのだ。

「ヨーイチなら出て行ったよ」

ぼくは顔を上げた。「出て？」

ドーン

突然大砲のような大音響が鳴り、ぼくは首をすくめてその方向を振り返った。開け放ったままの扉の向こうに、崩れゆく建物の影が見えた。すぐ側にあった建物が急に崩壊し始めたのだった。それも、一棟じゃない、二棟、三棟と立て続けに。驚いてぼくはサイエンスを見る。「これは……」

「お前さんが留守にしとる間に、町の西側にも蝕陽炎の雲が現れた。ここももう駄目だ。朝を迎える頃には荒れ地になっとるだろう」

「そんな」マンションはガラガラと音を立てて崩れ落ち、粉塵が煙となって立ち込める。鉄骨は地面に突き刺さると、まるで飲み込まれていくように地中に消えていった。「こんなときにヨーイチはどこへ？」

「やぐら塔に行った。見えるだろ、あそこにある高い建物が」

ぼくは暗い中に目を凝らした。たしかにサイエンスの言う方向、崩れた建物の向こう側、金網の向こうの荒野の一角に、空高くそびえる長方形の影がある。蝕陽炎はもうその頭上を通り過ぎているにもかかわらず、その建物だけはびくともしていない。

「なんで……蝕陽炎に包まれてもびくともしない建物があるのか」ぼくは眼を細めた。「それに、そもそもあそこにあんな建物なんて、あったっけ……」少なくともつい最近まで、あんなものは建っていなかった。いったいいつの間にかできたんだ？

「恐らくあれは、外の世界が建てたものだ」とサイエンスは言った。「いつの間にできていたのかは、知らんがな……」

そのときぼくは事態を把握した。「そうか、だから……」

「どうした？」

「ヨーイチは、外の世界に行く気なんですよ！」

「なんだと？」

くそ、ヨーイチのやつ、ぼくにはイツキが居ないこの状況でとても音楽どころじゃない、なんて言っておきながら、まだこの町を捨てて外の世界に行こうなんて馬鹿な考えを持ち続けているのか？ あれはまさか、イツキを取り戻せるとでも思っているのか？

「一体何を考えてるんだ、ヨーイチ」

「なあ、トキよ。つかぬことを聞くが、あのやぐら塔が建っていた場所に、元々何があったか、覚えているか？」

「えっ」ぼくは爺さんを見た。

駄目だった。なぜか思い出すことができなかった。おかしい、このガレージに来るたびに見ていたはずの風景だ。知らないはずはない。

「じゃあ聞くがな、お前さん、路面電車の車体は何色だったか、思い出せるか？」

ぼくは呆然とした。そんなはずはない、昼間乗ったばかりなのに忘れてるなんて。

「やはりな……。そのうちお前さんは自分の家の形や学校の壁の色も思い出せなくなるだろう」

「どういうこと？」

「どうやら、蝕陽炎に消された場所は、記憶からも消えていくらしい。完全な消滅。初めから無かったことになってしまうんだよ」

ぼくは試しに、町はずれのホスピスの外観や偏西風避けのウォールビルの形、郊外の金網の色など、いくつかの街並みを思い出そうとした。でも駄目だ、ごっそり思い出せなくなっている。建物が消えてしまったら、そこの思い出まで消えるのか？ 脳裏をイツキの微笑みがよぎった。そして、ヨーイチと三人で過ごした学校での日々も。

どうしたら良いんだ。

「くそっ」ぼくはエンジンを切ったばかりのバイクに再びまたがった。「爺さんは安全なところへ」

「おいお前、どこへ行く？」

「ヨーイチを連れ戻してくる」

「無茶だ、ヨーイチは奴らに魂を売ろうとしているんだろ？」

発車し掛けたところでぼくはブレーキを握った。「なんだって？」

「もしもあいつが本気で外の世界に行きたいと思っているのなら、恐らく、テテに生まれ変わるつもりなんだよ。そうでなければ亜空間バレーを超えることなんぞできんからな」

ぼくは思いっきりアクセルを捻った。ウイリーした車体で崩壊したビルの残骸を縫うように交わり、崩れた道路をジャンプ台にして町の境界線の金網を飛び越えた。そして荒野の果てにそびえるやぐら塔を目指した。

A photograph of a heavily rusted metal surface, possibly a piece of machinery or a structural component. The metal is light-colored, likely aluminum or steel, and is covered in extensive brown and orange rust. There are several dark, irregular patches of rust, particularly on the left side and bottom. A vertical seam or joint runs down the center of the image. A large, bold black number '8' is superimposed in the center of the image. The overall appearance is one of significant wear and corrosion.

8



ヨーイチ、君は一体何を考えて居るんだ。テテになることは、生まれ変わるんじゃなく、単に自分の死体をテテに提供するというだけなのに。ぼくは見たんだ、助けてくれた人が、目の前でテテに変えられ、次の瞬間にはぼくに襲いかかってきたのを。テテになれば人間も何もなくなってしまふ。頭の良い君なのに、そんなことも分からないのか？ それとも何か抜け道があるとしてもいうのか。

どちらにしても、彼まで失うわけにはいかない。このままでは町が消えて無くなってしまふ、思い出も、何もかも。そうなる前に何とかしなくちゃいけないんだ。それなのに彼まで居なくなってしまったら、ぼくは――。

やぐら塔はもうすぐ眼の前だった。近付いてみると、それは竜よりも巨大な胴回り、首が痛くなるくらいに上を向かないと見えないほどの高さ、思っていたよりも遙かに巨大だった。月明かりのせいでやぐら塔の影は大地を真っ二つにするように町の方まで長く伸びていた。見たことのない建築だ。表面はあまりにもツルツルしすぎていて、氷のようだった。サイエンスの言っていたように、これは外の世界の建築なのか？ テテの手のように、蝕陽炎が町を壊し、異次元の建物に生まれ変わらせているのか？ ぼくはため息をついた。元々何があった場所なのか、思い出せない。

やぐらの周りに人の気配はなかった。ここが外の世界の建物なのだとしたら、敵陣そのものはずだ。なのにテテの姿もない。ぼくの背の三倍ほどもある巨大な自動ドアを開けて中に踏み入っても、あたりは完全に静まりかえっていた。

内部は巨大な回廊だった。というよりも、正確に言うと回廊状の階段がただひたすら四角く渦巻きながら遙か上空へと続いている。まるで正方形のネジ穴のように。薄暗い階段は途方もなく長く、登れども登れども終わりが見えてこない。正面の壁にだけ、一定の間隔で小さな四角い窓が縦に並んでいる。その数を数える限り、恐らく20階くらいには達したと思う、かなり息が切れてきた頃、突然上の方から男の声が響いてきた。

「さあ、早くしろ……」

ヨーイチの声だ。ぼくは心臓を握りしめながら階段を駆け上がった。一体誰と話しているんだ？

「早くしろ」先ほどよりもだいぶ声が近づいた頃、頭上に白い明かりが見えた。踊り場か、フロアのような場所が宙に浮いている。階段を上りきる、目の前に現れたのは10メートル四方ほどの平坦なスペースだった。どこかからつり下げられた、惑星のような丸いダウンライトの光に照らされ浮かび上がっているのは、ヨーイチと、一体のテテ、そしてイツキの団地で見かけたのと同じ黒い服を着た人々だった。一人は禿げ掛かって額の広くなった白髪をオールバックにしたしわくちやの老人、もう一人は若い短髪の男、そして三人目はおかつぱ頭の女だった。そして三人に付き従うように立ち、ヨーイチと向かい合っている一体のテテ。それは、電車の中でもぼくたちを追ってきた、あの片目のテテだった。

「さあ、消したいなら消せ！ イツキをやったみたいに」ヨーイチは両手を広げてテテに一步、また一步と近づいていく。片目のテテは傷ついていない方の瞳もかすかに細めて沈黙していた。ぼくは初めてテテの表情らしきものを見た。

ぼくは後先考えず、力一杯声を振り絞っていた。

「ヨーイチッ！」

「トキか」彼はうるさそうに振り返る。「なあ、トキ、きっとオレたちはこのままじゃ一生掛かってもこの町から出られないんだよ。だからオレはテテになるんだ。昨日、VTRを見てて分かったら？ 蝕陽炎とテテが外の世界の次元で生まれたものなら、テテになりさえすれば、亜空間バレーを越えて、外の世界に紛れ込める。止めるなよ、こんな町捨ててオレはとっととテテになっちまいたいんだから」

「こんなときに、君はまだ外の世界に行くとか言ってるのか？ 音楽を続けられるのかさえ分からなくなっているのに——」ヨーイチはおかしくなっている。眼鏡の向こうの眼は三白眼で、アヒルのような口を横に裂けそうなほど引き延ばし、神経質そうな笑みを浮かべている。明らかに正気の顔じゃない、ドラッグをキメてる時よりひどい顔をしている。一体どうしたんだ、ヨーイチ……。

「そういうわけじゃない、そういうわけじゃないよトキ。オレは、テテになってイツキと一緒に外の世界で暮らしたいだけだ。良いか、これはオレとお前の戦いなんだよ。お前は隠しているつもりかもしれないが、オレに黙ってあいつの家に行ったことくらい、知ってるよ」

「なんだって」

「オレの居ない間に、二人で逢いやがって。だから今度はオレが出し抜いても良い番だろ？ そうだろ？」

どうしてヨーイチが知ってるんだ……イツキが理由もなく言うだろうか。彼ら二人の関係がこじれるだけなのに。

「イツキはいつもそうだ」とヨーイチが突然話し始めた。「いつも、オレと一緒にいるときはお前の話ばかりして。オレのことなんか見てくれなかった。どうして、どうしてそれなのにオレはお前なんかのためにいつも必死になんかきやいけなかったんだ？ そうしたからって何かが報われるのか？ 遠のいていだけなのに」

ぼくはよくわからなくなっ眉をひそめた。「どういうこと？」

「トキ、イツキとオレが付き合ってたなんてのは、嘘だ。本当はな、オレはイツキの何でもないんだよ。あいつはオレのことなんか少しも眼中になかった。何も認めてくれなかった。どれほどお前のことで相談に乗ってやったりしてもな」

まさか。脳裏に、本当にそんなんじゃないから、とヨーイチとの同棲を否定したイツキの顔が甦る。話があると言って呼び出されたにもかかわらず、結局明かされずじまいだったぼくへの話。そしてあの夢。

「嘘だろ……」

「お前、本当にトコいんだな。オレもお前みたいな人間に生まれたかったよ。そうしたらイツキはまだオレを振り向いてくれたかもしれない」

「どうして……あんまりじゃないか。イツキが、死んでからそんなことを言うなんて」

「あいつは死んでない。生まれ変わっただけなんだ」

「ヨーイチ、イツキはもう居ないんだよ！ この町では、墓石が死亡証明書代わりだ。あいつはもう死んでしまったんだよ。もし生きていたとしても、それはイツキの身体で作られたテテであって、イツキじゃない」

「それはお前やオレが人間だからだ」ヨーイチは言った。「テテになれば、オレはこいつらの中

からイツキを見分けることができるはずだ。テテになれば、オレはこいつらの営みに混じることができるはずなんだ」ヨーチは口元を歪めて笑いながらそう言い放ち、テテに自ら歩み寄っていった。そしてテテの手を掴み、自ら額に押し当てた。

「トキ、お前以外は誰もオレのこと、すごいなんて言ってくれなかったよ。ありがとうな。昔からオレは孤独だったんだ。何かで人より秀でれば、白い目で見られるばかりで。親もオレを守ってなんてくれなかった。二人で、勝手にオレだけ残して死んでしまっただけ。将来があるから、なんて価値観押しつけて。でも、世界が変わればやり直せるかもしれないだろ。外の世界なら、オレはもっと愛される。イツキだってオレのこと、見てくれるかもしれない。そしたらこんな町なんかいらぬ、この町での思い出も何もかも、オレには必要ないものになる――」

「ヨーチ……」お前、そんなことをずっと思って生きてきたのか。あんなに頭が良くてスポーツ万能で才能があるヨーチが、ぼくなんかと一緒にいてくれたのは、そういうことだったのかよ。「ヨーチ！」

彼の身体は蝕陽炎に苛まれた建物と同じにゆらゆらと揺らぎだし、そして煙を上げはじめた。「そうだ、これで良いんだ。じゃあなトキ」彼は弓なりにのけぞって痙攣したまま振り返る。その身体はゆっくりと透明化していった。「イツキにはオレからよろしく言っとくよ」

「違う！ 早まるな！ テテになるっていうのは、生き返るわけじゃないんだよ！ 心を蝕陽炎に乗っ取られて、過去の記憶も、思い出も何もなくなってしまうだけなんだよ！ その証拠に、イツキはテテに殺されたお母さんから――」

でもぼくの声は届かなかった。彼の身体は透けながら、黒ずんでいった。

「お前はこいつらと一緒にこの町を滅ぼす気なのか！」

ヨーチは微笑んだ。そして砕け散る砂人形のように爆発し、黒い破片が空気中に散った。

それだけだった。

何も起きなかったんだ。飛び散った身体はもはや目に見えなくなり、彼のいた場所には煙さえ立っていなかった。何も跡形など残っていない、固唾を吞んでヨーチの居たあたりを見つめていたが、一向に灰が集まってくる気配がしなかった。

「どうして再構築されない？」ぼくは怪訝してそうつぶやいた。「なんでテテとして生まれ変わらないんだ……」ドクターサイエンスの分析は間違っていたのか？ でも、ぼくは確かに消えた人間が生まれ変わるのを見たんだ。VTRでも、肉眼でも。

VTRでも？

そういえば、サイエンスが全てのモニターを一時停止したあとも、なんだか一瞬テテが動いたような違和感のする画面があった。他と違って、一体だけしかテテが映っていない画面だ。まさか、あのモニターは一時停止されていなかったのか。消え去った人間がいつまでも蘇生せず、テテもじっと立ちつくしているだけだったから、単に止まっている映像のように見えていただけなのか。だからテテが一体だけだったのか――。

まさか、全ての人間がテテに生まれ変わるわけではなく、例外があるということなのか。

困惑したぼくを尻目に、例のテテがゆっくりと歩み出す。ぼくはきびすを返し、螺旋階段めがけて走った。とにかくここから逃げ出さなくては。しかし、すぐに例のおかっぱの黒服にものす

ごいスピードで回り込まれ、逃げ道を塞がれた。あまりの早さにあっけにとられていたせいで、後ろからもう一人の黒服が忍び寄ってきていることに気がつかなかった。油断している隙に、ぼくは彼に羽交い締めになされ、全く身動きが取れなくなってしまった。

「くそっ、離せ！」ぼくは手足をばたつかせて暴れてみたが、黒服はものすごい力で押さえつけていて、びくともしなかった。

「離してやりなさい」そのとき、やけに年老いたしわくちゃな声がした。振り返ると、年老いた黒服が、杖をつきながらゆっくりとこちらに歩み寄ってくる場所だった。ぼくの身体から若い黒服が離れる。

「手荒な真似をして、申し訳ない」老人はとても穏やかな口調でそう言った。彼はどこかの民族の酋長のように荘厳な印象を漂わせている。

「あんたは――」

「わたしたちは、あなたがたの言うところの、外の世界の人間です。かつてこの町の民からは、“遠き人”という名で呼ばれておりました。あまり好ましい名ではありませんが、便宜上、何かの代名詞によって呼ぶ必要があるのなら、そう言って頂いて結構です」

「つまり、テテをこの町にけしかけた侵略者――」

老人は首を振る。「それは違います。我々は、むしろ先の戦争でバラバラの次元に分割されてしまった世界を一つに紡ぐためにやってきた」

「分割された世界を紡ぐ？」

「そう、大昔に海によっていくつもの島国へと引き裂かれた大陸以上に、戦争で生じた亜空間バレーという異次元の谷間によって分割され、孤立させてしまった、世界各地の取り残された集落たちを」

「信じられないな」どこか遠くに巨大な侵略国があるというのならまだしも、そんなにたくさん、人が住んでいる場所があるなんて。戦争が終わり、この星のほとんどは壊滅した。生き残りは自分たちだけだ。ぼくたちはそういう教育と常識の元に育ってしまっているんだ……。

そのときぼくはあることに思い当たった。「そうか、ヨーイチをそそのかしたのはあんたたちだな」

ヨーイチは、この遠き人とかいう連中と、ずいぶん前に出会っていたのではないか。だから、ぼくから何と言われようと外の世界の存在を信じてやまなかったんじゃないのか。ぼくは震える拳を握りしめた。

「ヨーイチをどこにやった！ なぜテテにして、そっちの世界に連れてってやらないんだ！ あいつは自分から志願してテテに触れられたのに」

「残念ながら、ヨーイチという生命は、テテとしてこちらの世界にも登録されていない」

「なんだって」確かにヨーイチが消えたとき、いつもと何かが違うようながしていた。テテに触れられた人間は例外なく光の粒子になって空中に飛散するのに、ヨーイチの身体はむしろ光を失うように黒ずんでゆき、爆発するように粉々になった。

「この町にも存在せず、我々の方にも登録がないとすれば、どちらの世界にもヨーイチという存在は実在していないということ。亜空間バレーを越えられず、その狭間に消えてしまったのでしよう。白い未発達体しか育たないこの町では、人にも、不完全なテテにさえもなること叶わず、消えてしまうような人間が、とても多い」老人は静かに唇を舐めた。「この町で唯一まともなテ

テに育ちそうなものと言え、そこにいる君の友達くらいのもです」

ぼくは眼を細めた。友達？ ぼくは一瞬ヨーイチが甦ったのかと思った。でも、そうじゃなかった。遠き人が指し示していたのは、最初から居た、あの片目のテテだったんだ。ぼくはその陶器のような白い肌を見る。

ともだち？

そのテテは、片目を潰されて視線の力が弱いからいくら目を合わせていても金縛りになることがないのだと、そう思っていた。でも、もしかして、それは違うのか？ 友達だから、ぼくを狙わなかったのか？ 一瞬そんなことを考えた。そんなはずはない、テテになれば記憶が無くなるはずだ。でも、さっきもこのテテはヨーイチに触れるのを躊躇っていた。

「まさか、イツキ……？」ぼくはその名を口にした。

テテは、片方の開いている方の眼でぴくん、と反応した。

こいつ、分かるのか？ ぼくのことを、分かるのか？「ぼくだよ、トキだ。わかる？」

「ト……キ……」たどたどしくテテはつぶやいた。初めて聞く、テテの声。無線越しのように静かな雑音が混じったような、不鮮明な声だった。

まさか、本当にイツキなのか？ ぼくとヨーイチはずっとイツキから逃げていたのか。ライブ会場で彼女が消え去った直後から、ずっと。本当にそうなのか？ ヨーイチが眼にスティックを突き刺した、このテテが？

でも確かにこいつはぼくやヨーイチを襲わなかった。チューブトレインの中でテテの群に出くわしたときだって、このテテが運転席に突っ込んでいったから、電車が停まり、ぼくたちは逃げ延びることができた――。

ぼくは恐るおそる、手を差し出し、歩み寄ろうとした。テテは震えているのか、それとも何かの痙攣なのか、顔をカクカクと細かく振動させながらぼくを見ていた。が、

「トキ！」

不意にぼくの名を叫んだかと思うと、ぼくの手から逃げ出すように飛び退いた。そして重力を無視するように大きく跳躍したかと思うと、螺旋階段から螺旋階段へと飛び移り、塔の上層階へと消えていってしまった。

「イツキ！」ぼくは後を追う。

不鮮明だが、あの声は、聞き覚えがあった――確かに、イツキの声だったんだ。

なんてことだ、せつかく再会できたって言うのに、相手はテテになっていた。しかも、ヨーイチが片目を潰した相手だったなんて。ぼくは遠き人たちを睨んだ。みんなこいつらのせいだ、イツキがテテになり、その目をヨーイチがつぶし、彼は消滅し、町が崩壊する。こいつらが来なければぼくたちは平和だった。こいつらが来なければ、何も失うことはなかった。バラバラになった世界を一つにするなんて、嘘だ。この町は、どことも繋がらなくて良い！

全速力で、ぼくは遠き人たちに立ち向かっていった。けれども彼らの前には透明な見えない壁のようなものがあって、ぼくは指一本触れることさえできず、はじき返された。

「くそっ」ぼくは尻餅をついた状態から身をひるがえして階段へと向かい、テテの後を追った。螺旋階段を駆け上がるぼくを、黒服たちは止めはしなかった。

ネックを揺らし、身体を揺らめかし、エレクトリックギターを奏でるイツキ。ココアを勧めながら微笑むイツキ。あの団地を愛するイツキ。強炭酸のラムネを一気飲みして涙を浮かべるイ

ツキ。一人ノートに向かってぐしゃぐしゃ歌詞をしたためるイツキ。そして――ヨーイチの説明によると――彼ではなく、ぼくを愛していたというイツキ――。

目の前のテテがその彼女だって？ どうしてイツキが大切な町を壊す側にならなければいけないんだ。あまりにも非情だ、あんなにこの町を大切に想っていた彼女が、よりによって最も完成度の高いテテだなんて。しかもヨーイチではなく実はぼくを愛していたなんていうことを、今更聞かされるなんて。その上でこの状況だ。つまり、肝心の彼女はもう居なくて、目の前にいるのは、死体を使って再構築された、テテだけ。何もかもがひどすぎる、あまりにも残酷、悪意に満ちている。ぼくは叫声を上げた「イツキィィィ！」

追いかけたって何もできないと分かっているけど、他にどうしたらいいのか分からなかった。もしかしたら、何かできるかもしれない。あのテテはぼくを、覚えていた――。

覚えて？

ハッとした。逆に、ぼくはどうして、イツキのことを覚えているんだ？ 消え去った建物はあれほど思い出せないのに、イツキだけじゃない、トルビーやタクヤ、セザム……消え去った友達は一人居らず思い出せる。もしかして、人々はテテになっても、完全に消滅するわけじゃないのか？

「待ってくれ！」テテの背中に手を伸ばし、目が回るほどの螺旋階段を駆け上がった。その先にあったのは、松明に照らされた巨大な扉だった。テテの姿はどこにもない。この重厚な装飾が施された、地獄の門のような扉の向こうに行ったのだろうか。少し手で押ししてみるがびくともしない。何て重い扉だ。ぼくは肩を押しつけ全体重を掛けた。ギギギギというあざけるような音を立て、それはゆっくりと開いていった。白い光が長方形に漏れ、伸びてくる。ぼくは階段を振り向いた。遙か下方にこちらをじっと見上げる三人の黒服が居た。ぼくは彼らに視線を返し、扉の向こう側に、光の中に飛び込んだ。

そこは塔の屋上だった。風に流れる暗い空の下、ツルツルした床が一面に広がっている。髪をめちゃくちゃにするほどの風。ぼくは前を見た。テテが、その丈の長い白い衣をまるでフラッグのようにはためかせ、立っていた。無表情な片目がぼくを見つめている。色のない虚ろな瞳、そしてもう一方の傷ついた眼も、無理矢理開こうとしているのかビクビクと寄生虫のように痙攣していた。ぼくは固唾を呑んだ。

「イツキ……」

彼女の背後には荒野の地平線が見え、すぐそこに蝕陽炎の雲が迫っていた。ぼくは町を振り返る。まるでミニチュア模型のように小さく霞んだぼくの町。至る所から煙が上がり、ほとんどの建物がガラガラと崩れていった。その中に、燃えさかる赤い屋根が見える。あれはぼくの学校……のような気がする。でも屋根の色以外は全然頭に浮かんでこない。サイエンスの小屋が目前で食べかけのチョコレートケーキのようにぺしゃんこになって、まさにその瞬間からそれが何だったかわからなくなる。半壊した町の全貌を目の前にして、ぼくは既にその多くを思い出せないことに気がついた。

町が、消えていく。目の前から、心の中から。

ただ、イツキの団地はかろうじて立っている、ぼくは唇を噛んだ。せめて、せめてイツキが愛したあの団地だけはこのままどうか残ってくれないだろうか。イツキの愛したあの団地だけは、

忘れずに、どうか留めて――。

そう思ったのと時を同じくして、どこからともなく、牛乳のように白い液体が壮絶な勢いで降ってきた。たちまちぼくの足下に白い水たまりが広がったかと思うと、その中に無数の瞳が浮かび上がり、そこからテテが発芽するように現れた。ぼくはあわてて白い液体に足が触れないように後ずさった。顔を上げると、この屋上を何十、何百という数のテテが埋め尽くしていた。

「畜生！」畏だったのか、イツキ――。

怪物たちは、上半身だけで這ってぼくに襲いかかってくる。後ずさる、不意に背中に冷たい空気を感じた。もう後がなかった。後ろには数百メートル下の地面。既にぼくの踵は半分宙に浮いていた。

その瞬間に何が起きたのかはわからない。ただテテたちが一斉にぼくに襲いかかってきたかと思うと、不意に「アアアアアアアアアア――！！！」と片目のテテが怒り狂う猫のように黒い口を開き、長い手をいっそう長くして他のテテたちを薙ぐように吹き飛ばし始めたのだ。

「イツキ？」

だが形勢はすぐに逆転した。はじき飛ばされたテテたちは、傷口がたちまち癒えてゆき、むくむくと起き上がる。ぼくを追い詰めつつあったテテたちが、一斉に片目のテテへと襲いかかる。

「イツキ！」ぼくはとっさにテテたちに背後から殴りかかった。片目のテテは明らかに疲弊していて、瞬く間にほかのテテたちの海に飲み込まれていく。なぜ、他のテテたちはダメージを負ってもすぐ何事もなかったかのように起き上がるのに、このテテだけは、いつまでも片目がつぶれたままなんだ？ しかもなぜ他のテテよりも完全体に近いなんて言われるんだ……。ぼくははつとした。

そんなことより、彼女は身代わりになってぼくを助けてくれた、これは畏なんかじゃなかった。イツキなんだ、やっぱり、イツキなんだ――。

扉が開け放たれる、黒服の三人が姿を現した。それと時を同じくして、片目のテテの手が蟻地獄に落ちたように、テテたちの中にゆっくり沈んでいった。

「イツキ！」はじかれたように、ぼくは走り出していた。テテたちを踏みつけ、その白い渦の中心に身を投げる。テテに変わってしまっても構わない。どうせ死ぬなら、イツキを助けて死にたい。それでもし助けることができなかつたとしても、何もしないよりはいい。イツキは、ヨーイチにも、誰にも助けられることなく孤独に消えてしまったのに、ぼくを助けてくれたんだ。

ぼくは片目のテテの白い手を取った。触れれば消されるその手を取った。氷のように冷たい手のひらだった。片目のテテはぼくを驚いたような顔で見ている。

「イツキ……」ぼくが彼女に語りかけようとしたそのとき、ほかのテテたちがものすごい力でぼくと彼女のことを押さえ込み、ぼくは顔面から地面にたたきつけられた。上から大量のテテたちが覆い被さってくる。しかし、片目のテテは獣のような荒い息を吐き、ものすごい力で奴らをはねのけた。そして傷ついていない方の片目を巨大に開き、そこから大きく息を吸い込んだ。ぼくの胸に激しい痛みが走る。まるで肋骨をこじ開け、直接心臓から血をを吸われるような激痛が。

ぼくは存在感を吸われて消えるんだな。これで何もかも終わるんだな。このテテがイツキだったとしても、テテである以上は、共存することなんて不可能か。これはハリネズミのように、たとえ良心が残されていたとしても、触れる物を皆傷つけてしまう存在なのだから――。

意識の糸がほつれて闇が来る。最後に見えたのは、色彩を失い、透けていくぼくの身体だった

。





9

どこまでも深い海のような場所を、逆さまに沈んでいく。

海の底から儚い歌声が聞こえ、気泡の音が何かのリズムのように響くだけで、あとは何もない、真っ暗な空間。夢のようにはっきりとしない意識。ここが、消えてしまった後の世界か。

そう思った矢先、水底にぽつんと一つの白い光がちらつくのが見えた。ぼくの身体が静かに沈んでゆくにしがたって、その光は次第に大きくなっていった。それは、白い服を着たイツキだった。エレクトリックギターの代わりに白骨を抱き、ぼんやりと歌を歌い続けているイツキの姿だった。ぼくの身体は引き寄せられるように彼女の元へ運ばれていく。それを降り始めた雪を見るような目で見つめている。ふわりと着地する、海底の砂が煙幕のように舞い上がる。

彼女の体はテテに消される瞬間のように透きとおっていた。そのせいでぼくはあまり再会の喜びを感じられなかった。きっと、これもテテによって作り出された幻影か何かなのだろう。

彼女が胸元に抱いた白骨は、見覚えのある黒縁の眼鏡を掛けていた。ぼくはゆっくりと瞬きをした。

「人は骨になると見分けがつかないね。みんな同じに見える」イツキはゆっくりとぼくを見た。彼女の片目はテテ同様に傷を負い、つぶれていた。「こんな眼鏡を掛けさせたりしても、ただの骸骨、みんな同じかたちをした、人間の中身があるだけ。不思議、見分けがつかないの、まるでテテのように」

「イツキー」

「ここはテテの中にある、分裂の間よ」

「分裂の間？」

「そう。肉体をテテに奪われても、魂は消え去らずにここに保管され続けるの。人間の体は魂を失うと崩壊してしまうから、元の持ち主の意識はどこかで生かし続けなければならない。さもないとテテは消滅してしまう」

「どうしてイツキの中の、イツキの魂が囚われている場所にぼくが居るんだ？」

「あなたには今、居場所がないから。あなたの身体でテテが構築されるまでの間、むき出しになった魂は一時的にここにとどまるの。あなたを消した、張本人の中に」

ズン、と音がして、海底の砂が一気に舞い上がった。その下から現れたのは、おびただしい数の骸骨だった。骨が、朽ち果てた人間の骨格が、呆然と顎を開き、抜け殻の眼で方々を見つめたまま、山のように折り重なっていた。そしてイツキはその上に、仕方なさそうに腰を下ろしていた。人骨の丘、人骨の草原。ここは、地獄か――。

「驚いた？ 骨ばかりで」

ぼくは頷き、自分の身体を一瞥した。ぼくは骨になったわけではなかった。けれど、イツキ同様、全身が透きとおったままだった。

「骨になってここに流れてくるのはテテになれなかった人たちだけ。あなたは死んでない。魂の状態、テテになるのを待っているだけだから」

ぼくははっとした。「ヨーイチの魂もここに来た？」

イツキは首を振り、「来たのは骨だけ。ほら、この骨」と抱きかかえている人骨を揺すって見せた。眼鏡を掛けた骨の歯がカクカクと音を立てる。「わたしが手を離したら、ヨーイチも他の骨ときっと見分けが付かなくなってしまう」

これがヨーイチの骨――。ぼくがその頭蓋に触れようとすると、イツキは微かに身を引いた。

「イツキ、どうしてヨーイチだけがテテになれなかったんだ？」

「ヨーイチだけじゃないよ」と彼女は言う。「ここにある骨ぜんぶ、テテになれなかった人たちのものだから」

ぼくは周囲を見渡した。人骨の丘、人骨の山、人骨の原――。

「この膨大な数の髑髏が全て、テテになれずに消えた人？」

「そう、テテに触れられてバラバラになったまでは良かったけど、その後、亜空間バレーを越えられず、再構築が叶わなかった人たちの、行き場を失った身体」

「どうしてこの人たちはテテになれなかったんだ」

「別にテテになれたから良いってわけじゃないよ、トキ」イツキは寂しそうに唇を尖らせる。「テテは孤独だよ。テテになると、ここに一人で居るのが寂しくなって、誰かと一緒にいたくって、いろんな人を引きずり込もうとしちゃうから。でも、そんなことできないの。ここに貯まっていくのは骨の屍体だけ、生きた人の魂と一緒にいられるのなんてほんの一瞬だけ。相手の新しい肉体が完成するのを待つ間だけなんだから。いま、こうしてあなたと居るように」

「イツキ――」

「ヨーイチは来なかったけど、トルビー君とロラには会ったよ。あと、セザム」

「イツキが消したのか」ぼくは体育館での光景を思い出し、そう尋ねた。

彼女はこくと頷いた。「そうだよ」

「なんてことを」

「違うの。自然とそうになってしまうの。眼と手がある限り、自然と相手が触れて、自然と相手が消滅してしまう。もちろん目を閉じ、手を自分でほどけないように組んでいることもできる。

でも、消さずにはいられない。それがテテなのよ。だから、つらくなっちゃったんだよ、わたし。それで、他のテテたちみたいに手当たり次第に消すような真似、できなくなっちゃって。テテになりたがっている人たちだけを狙うように触れるようにしたんだ。ヨーイチのように、あの町を捨ててテテに寝返れば助かるって思っている人たち。そういう人たちだけね。でも、駄目なの。そういう人はテテになれずに消えちゃって、死骸だけがここに降り積もる。ヨーイチみたいな人は、決まって一人もテテにはなれなかったんだ。望んでない人ばかり、テテになって――」

「それも、不完全なテテとかいうやつに？」

イツキは頷いた。

ぼくはため息をついた。一体、テテとは何なんだ。どうしてテテになりたい人間は、テテになれずに消えてしまう？ テテになりたいとも思わない者だけがテテになる？ あの遠き人は、テテになることを“登録”と呼んでいた。この町の墓石に名前が刻まれると同時に、外の世界の何かしらの登録簿に、テテとして名前が記載されるのか。やっぱりテテになることは、ヨーイチが言っていたように、外の世界の住民として認められることなのだろうか。でも、この町のテテはみんな不完全なテテであって、その中で、イツキだけがどうして完全なテテに近いんだ。他のテテたちと、何が違うんだ――。

「テテになれなかった人間はどうなるんだ？」

「居なくなる」とイツキは言った。「この町にも、亜空間バレーの向こうの世界にも」

「つまりそれは、ヨーイチが、死んだっていう？」

イツキは、答えなかった。

ヨーイチが、死んだ。最後に彼があんなに薄情な振る舞いをしていても、死がショックであることにはななかった。ぼくは心のどこかで、イツキのように、生きていたものと信じていたから。「そんなの、信じない。骨になろうが墓ができようが、ヨーイチが死んだなんて証拠、どこにもないじゃないか！」

「わたしがこの手でこうしてしまったのよ」その眼は赤く潤んでいて、今にも涙の雫を落としそうなほどに苦しげに喘いでいた。「死んでいようと、骨になっていようと」イツキの身体は波紋の広がる水面のようにゆらゆらと波打った。

ぼくは掛けるべき言葉を失った。

テテになった人たちは、みんなイツキのように苦悩しているのだろうか。テテが人を消すのをどうにもできず、指をくわえてここから眺めさせられ、そして、消した人々のことを思ってこうやって苦悩し続けているのだろうか。イツキだけが本当のテテになれるなら、こんな生き地獄のような状態が、正しいテテのあり方だということか。肉体を利用されるだけでなく、心にもこんな苦痛と煩悶が強えられる、それが本来のテテだということか。冗談じゃない。

「イツキ」ぼくは彼女の側に歩み寄ろうとした。「君がこんなところにいる必要はない」

「来ないで」イツキはぴしゃりと言った。

ぼくは怪訝に眼を細めた。

「もう時間だから、帰って」

「厭だ。ここから一緒に出るんだ」

「無理よ、わたしはここから出られない。出れば、わたしも、あなたも、テテごと消滅してしまう」

「そんなことない。忘れられて消えてしまうのは蝕陽炎にやられた建物とか街並みだけだ。その証拠に、テテになった人のことも、ヨーイチたちのことも、忘れてないじゃないか。町と違って、人は消えたりしないんだよ」

「仮に消えなかったとしても、元のままではいられない」イツキはふさぎ込むように頭を振った。「それが、異なる次元と触れてしまうということなのよ」

「イツキ」

「あなたまで骨になんてならないで。テテになっても、せめて、どこかでトキが生きていると思わせて。せめて――」

イツキが立ち上がると、潮が逆流をはじめ、彼女の短い髪がいつそう逆立った。ぼくの身体は風船のように浮き上がり、必死で地面の骸骨に足をかけようとするが、つま先はどんどん離れてから回る。

「さよなら、トキ」

「くそっ」ぼくはとっさにイツキの腕を掴んだ。「ヨーイチの骨だけは抱きしめやがって」

「あっ」イツキの身体もぼくに引っ張られてふわりと浮いた。彼女につられて手を繋いだままのヨーイチの骨も浮かび上がった。「離して！ このままじゃ二人とも――」

「このままテテになってたまるか」ぼくは叫んだ。「ぼくは絶対にあの町を裏切れない」

「お願い、わたしのために――わたしはもう、誰も失いたくない。わかって」

その言葉に込められた感情を悟り、ぼくは一瞬、イツキを掴む手の力を緩めかけた。でもぼくは首を振る。ぼくが愛したイツキは、違う。誰よりもあの町を想い、誰よりもあの団地を愛した少女だったはずだ。

「どんな理由があっても、あの町をぶち壊す化け物になんかなりたくない！」ぼくは目を閉じてそう言い放った。もう海底を数メートルと離れていた。「ヨーイチはここへ来た時点で骨になっていた。でも、ぼくはまだ骨にはなっていない」

「それはあながテテになるからよ」

「そう、そうだ、ぼくが骨にならないことは、もう最初から決まっているんだ。それなら、このまま帰れば復活できるかもしれない。君も――」

イツキはハツとしたように、握りしめた拳を口元に当てた。

「そうだろ？ このまま侵略者に身体を乗っ取られるなんて……」

そのときだった、イツキの下から無数の骨が組み上がり、彼女の身体をがっしりと捕まえる。

「イツキ？」

「みんなわたしを引き留めたがってる。魂が出て行けば、肉体が滅びてテテは死んでしまうから。わたしはここを守らなきゃいけないの。わたしがこの人たちをこんなふうにしてしまったんだから」

「イツキにそんなことする義理があるかよ」ぼくは彼女にすがる骨どもを蹴飛ばした。「あの町に戻って、またギター弾いたり歌ったりしたいだろ？ それがイツキの人生だろ？ こんなところで延々と道草食わされてる必要なんて――」

バラバラと骨たちは落ちていく。けれどもイツキ自身によって抱きかかえられたヨーイチの骨、黒縁の眼鏡を掛けた骨は、イツキをしっかりと掴んで引きはがそうにもなかなか離れなかった。その頭蓋骨に足を掛けた瞬間、ぼくの心にヨーイチとの膨大な思い出が蘇った。汗だくになりながらドラムを叩く彼、ヤンキーに絡まれたぼくを助けた彼、休み時間にいつも机の上に両足を乗せる彼、難しいテストの時にそっと答案をぼくの方へ回してくれる彼、初めてイツキと出会った日にお互いの顔を見て笑い合った彼――。この骨が、こんな骨がヨーイチだって？

ぼくは首を振った。今ここで思い出なんかにはほだされて、イツキを失うわけにはいかない。ぼくをずっと騙していた彼を恨むつもりはない、けど、ぼくにかまけてイツキを守れなかったヨーイチのようにはなりたくない。ぼくは目をつむり、ヨーイチの骨をイツキの手から奪い取り、思いっきり蹴飛ばした。バーンという音がして、その骨は分解しながら下方へと落ちていく。ごめんよ、ヨーイチ。

「あんな町はいつか必ず滅びるの。近い将来、この世界にはテテか遠き人々か、どちらかしかなくなるから。町とか亜空間バレーとか、そういうものは全部なくなって、全てが外の世界にひれ伏すの。テテにならないと、わたしもあなたも消滅してしまうんだよ。あんな町のために、死ぬ必要なんかないじゃん」イツキは項垂れてそう言った。まるでヨーイチの魂が乗り移ったかのよう。

「あの団地のことも忘れるのか？ あの団地はまだそのままで残ってるんだよ。まるで君の遺志に守られているかのよう」

「いつか潰れるわ。形があるうえに古いものだもの」

「あんなに好きだったじゃないか。あれは嘘だったの？」

「嘘よ。全て嘘」そう言い放ったイツキに、ヨーイチの顔が背後霊のように重なった。

どうして！ なぜこんなになにもかもが嘘に溢れているんだ――。

「でも、トキ、わたしが愛したのはあなただけ――」

次の瞬間、不意にぼくの身体の上昇が止まった。イツキの身体が、腕がちぎれそうなほど重くなった。「イツキ？」怪訝して、彼女を振り向いた。「イツ……」

愕然とした。ぼくの腕にしがみついているのはイツキなんかじゃなかった。ヨーイチたちと同じ、カタカタと音を立てて笑う骸骨だった。

そしてその背骨は鎖のように遙か下方に伸びて、そこにうずくまる膨大な数の屍体と繋がっていたんだ。その背骨を黒縁眼鏡を掛けた人骨が、僅かに残った髪を揺らしながら、上半身だけになって笑いながらものすごい早さで駆け上がってくる。糸を辿る大蜘蛛のように。「痛かったぞトキ……」

ぼくは息を呑んだ。二体の骸骨がみるみる間にぼくの身体を這い上がり、その尖った指で顔を掴んだ。固い指先がものすごい力で食い込んでくる。皮膚が裂けそうな激痛に悲鳴を上げた。「テテにならないなら、ずっとここに居ろ」二つの骸骨が同時にそう言い放つ。

そのとき、それは起こった。突然、遙か頭上の海面が煌めいたかと思うと、光がオーロラのように揺らめきながら、海底までゆっくりと差し込んできたんだ。そしてそのまばゆい光は、突然向きを変え、ぼくにしがみついているヨーイチとイツキの骸骨を打ち抜いた。二つの骨は弓なりになり、顎を外しながら悲鳴を上げて、ゆっくりと沈んでいった。重しを失ったぼくの身体が、ぐんぐん上昇を開始する。

「イツキが」ぼくは瓦解して沈んでいく骨を見ながら叫んだ。その声に反応するように、バラバラになり落ちて行きかけた骨たちの手がいっせいに伸びる。でも、それに追いつかれるよりも早く、ぼくの身体は光に抱きかかえられ、海面に浮上した。ぼくを追い、無数の骨の手も水面から次々と突き出てくる。でもそれはたちまち瞬間冷凍されたように静止して、それ以上追っては来なかった。白い睡蓮の花のように五指を広げた無数の手を振り返り、ぼくはため息をついた。奴らはあの海から出られない――。

「イツキ」ぼくはもう一度あの死の海に向かって呼びかけた。水面の下に、静かにこちらを見つめる骸骨たちの顔が揺れている。そのとき、ぼくを導いた光が、肩越しにこちらを振り向いた。真っ白い、まばゆい光。

その中にいたのは、他ならない、イツキだった。

身体はどこへともなく押し流されていく。不意に目の前にヒビが入ったかと思うと、ぼくたちは固い地面の上に打ち上げられた。そこはやぐら塔の屋上、現実の世界、ぼくの町だった。ここは……現実……テテの中から出られたのか。

全身が羊水のような液体でビショビショに濡れていて、辺りにはテテの皮膚らしき白い破片が散らばっていた。そして。

ぼくの上には、イツキが、折り重なっていた。彼女は激しく咳き込みながら、水を吐き出した。ものすごい量の水。屋上の表面を覆わんばかりに水溜まりが広がっていく。テテたちはなぜかその水に恐れをなしたように、飛び跳ね撤退していった。

「トキ――」弱々しく彼女はつぶやきながら、震える両手で身体を起こそうとしていた。

ぼくは彼女を抱き起こす。ダサいTシャツ、ライブの日のままの服装、そしてこの小さな身体。その右目は痛々しく腫れて潰れたままだったけれど、正真正銘、本物のイツキだ。

「イツキ」イツキが生きている、彼女が生きてこの現実には――。「イツキが助けてくれたの？」

彼女は首を振る。「トキがわたしを助けてくれたのよ」彼女はフラフラと起き上がり、大きく呼吸した。「あと少しで、わたし押しつぶされるところだった。トキのお陰で、テテに負けずに済んだんだ」そして彼女は頼りない足取りで歩み寄ってくると、ぐったりとぼくの身体にしがみついてきた。

「イツキ――」

彼女が上げた顔を見たとき、ぼくは愕然とした。なぜなら彼女の瞳は、テテのときのままだったからだ。

「トキ」凍り付いたのは彼女も同じだった。彼女は何かを発見したようにぼくの頬にそっと触れ、目の中を覗き込んできた。「目が……」

ぼくは慌ててイツキから離れる。そして自分の顔を撫で、触り、確かめ、そしてイツキが差し出した鏡に映る姿を見た――。

テテ。

そこに写っていたものは、やはりテテの瞳をしたぼくの姿だった。そしてぼくの両手は、その指先からゆらゆらとした異次元光を放っていた。

「ようやく不完全でないテテが育ったようですね」声がした。振り返るとそこに黒服の遠き人が居た。

「不完全ではないテテだって――」

そのときだった。頭上で低く轟き続けていた蝕陽炎の暗雲がぴたりと静止したのは。空一面を覆い尽くしていた分厚い雲に一点だけ穴が開き、突如そこから、まるで照射されるレーザー光線のようにまばゆい光が降り注いだ。光は崩壊した大地を照らす。すると蝕陽炎に浸蝕された崩れかけの建物たちの下から、大地を食い破るように、真っ白い氷のように無機質な建物が次々と突き建っていった。粉塵が上がり、キラキラとした光が滴り落ちていく。あたかも世界が崩壊し作り替えられるような光景が広がっていた。

「侵略が、始まったのか」ぼくは眼を細めた。「ぼくたちのせいで？」

イツキは何も答えなかった。町はどんどん、見たこともない冷たい建物に覆い尽くされていく。町の人々がテテになり替わられていったように、崩壊した古い町が新しい街並みに取って替わられていく。これではますます町の本래の景色を思い出すことができなくなってしまう。ぼくは必死に、何か残された面影がないか、思い出せる景色がないか、目を皿にして町を見渡した。

でも、そこはもう焼け野原のように何もかも、失われてしまっていた。虚無だ。イツキの団地もない。イツキの団地……それすらももう思い出せない。

「イツキ、団地がどこにあったか、思い出せる？」

彼女は首を振った。どこにもあの団地がない。何としても忘れまいと思っていたのに、ぼくがテテの中に居る間に、消え去ってしまったのだ。

「もう、何も残ってない」イツキは呆然とつぶやいた。「何も――」

どうして町を愛した人が町の全てを奪われて最後に取り残されてしまうのだろう。どうして――。せつかく生きて戻ってこられたというのに、もう何もかもなくなってしまった。これが

らどうしたらいいって言うんだ。ぼくたちはどこに、誰の元に帰ればいいんだ――。

風の音、以外に何もない沈黙。まるで本当に何もないように、音のしない世界。

ぼくは呆然としてへたり込んだ。そのとき、ジーンズのポケットに何か堅い物が入っていることに気がついた。何だ？ 少し腰を浮かせてポケットに手を入れると、その何かは小動物のように飛び出して、地面の上を転がった。

ビー玉だった。

あれは今日の出来事だったのに、もうずいぶん昔のことのような気がする。ラムネバーのマスターがイツキに渡してくれと言っていたものが、落っこちずに残っていたんだ。

「ラムネバー……」とイツキはつぶやいた。そして球面をじっと見つめる。「これは……」

「最期に君が行ったときのポイントだよ。君が忘れていったから、マスターに渡しといてくれて頼まれた」

イツキは眼を細めた。「覚えてるわ。ジャンケンで負けて、わたしがあなたたちにラムネをおごったときのビー玉ね。あなたたちは河のソファに向かい合って座っていて、カウンターまで取りに来ようともしなかった。せめてどっちかが立ってくれば良かったのに、そのせいで、わたしはどっちの隣に座っていいか、わからなくなって……」

「イツキ……」彼女の言葉は、まるで呼び水のように、ぼくの記憶下から何かを引きずり出そうとしている。ラムネバーは、どんな場所だったろう――。

「ほら、トキも覗いてみて。この丸い球体の中に、見えるでしょう？」彼女はそう言って、ビー玉を手のひらに乗せて差し出した。

それは中に気泡を含み、つい先ほどまで居た海の中を一瞬だけ彷彿とさせた。でも――。

それを覗き込んだ瞬間だった。脳裏に、あの薄暗い店内の光景がはっきりと浮かんできたんだ。木目調の壁、ささくれたカウンターテーブル、華奢なネオン、綺麗に並べられたラムネの瓶、常連のモヒカンたちが座る赤いスツール……。どうやっても思い出せなかったのに、それが嘘だったようにくっきりと思い出すことができる。

「何か一つの物があれば、思い出は思い出すことができる。だからわたしは捨てたくないの、このビー玉を」

ラムネバーの記憶はそのままイツキとヨーイチと三人で楽しくやっていた頃の記憶を呼び起こし、この町の様子を、ありありと思い出させた。そのとき、町の方から巨大な鉄板を引っ掻くような音がした。ぼくはその方向を向く。すると、ぐしゃぐしゃに崩壊していた地下街が、あのラムネバーを中心に巻き戻されるように元通りになっていったんだ。ぼくの記憶に呼応するように、今建ったばかりの真新しい建造物を押しよけるようにして、崩れた砂塵の中から再び古びた廃工場や煤けた建物が起きあがろうとしていた。

「これは――」

町が再生を始めたんだ。空には伝書鳩たちが舞う。ぼくはまばゆさに目を細めた。

「町が元通りになっていく」イツキが呆然とつぶやいた。「わたしの団地も――」

彼女がそう言った瞬間、ぼくは無数の気配を感じた。テテだった。まるでこの町を元通りにはさせまいとするように、それまで遠巻きにぼくらを見つめていたテテたちが、いっせいに襲いかかってきたんだ。

「イツキ！」ぼくたちもテテの力で太刀打ちできるかもしれない。でもぼくの指先はもう光って



いなかった。はっと顔を上げたイツキも既に普通の黒い瞳に戻っていた。

「どういうことだ――」

そのとき遠き人が高らかに手をかざした。黒い服がマントのようにたなびき、頭上から町を照らしていた光が、巨大な生き物のようにテテたちの方を向く。そして奴らを容赦なく飲み込んだんだ。光の胃袋の中でテテたちが逃げまどいながら、悪霊のように消滅していくのが見える。光の先はさらに遠き人たちをかすめ、こちらに向かってきた。ぼくはとっさにイツキの肩を抱き、光の届かない方向へと走る。だがその矢先、光がシャワーのように拡散し、瞬く間にぼくたちは捉えられてしまった。まぶしさに手をかざし、目をつむる――。

数秒間の沈黙、目の前はただ真っ白く染まっていた。でも、それ以上には何も起こらなかった。恐るおそる目を開くと、ぼくも、イツキも、無事だった。ただ、周囲を取り囲んでいた大量のテテだけが、まるで断罪されたように忽然と姿を消していた。

「助けてくれたのか」ぼくはつぶやいた。

「あなた方が力を統御してくれただけのことです」遠き人はそう言って、しわくちゃの口元でうっすらと微笑んだ。「愚者たちが消え、ようやくこの町も正常に我々の次元と繋がれる」

そのとき、ぼくたちの前に、遙か彼方の地平線から虹色の道が伸びてきた。

「これは？」

「外の世界へと通じる道です。蝕陽炎の向こうに広がった世界へ、歩いていくことができます」ぼくは老人を見た。彼はぼくを見てじっと頷いた。「橋を架けるのも、私たちを統御するのも、これからはあなたがたが行うことになる。我々の役目もこれで終わる。やっと己の世界に帰れます」テテたちを消した光が遠き人を包み込む。どこからか、残りの二人も飛んできて、彼らは虹の橋に飛び乗った。

「あなたたちは一体……」

老人は橋を渡り、遙か彼方へと消えていく。どこからともなく残りの黒服たちも飛んできて、彼らも橋を渡っていった。

「我々はあなたがたの敵でも味方でもない。そしてあなた方自身でもない。別の世界の、住民です。そしてあなた方は」一瞬だけこちらを振り返り、老人は薄い唇からしわがれた笑い声を漏らした。「この町の守人ですからね」それが最後の言葉だった。

彼らが去っても橋は消えることがなかった。町はギリギリと音を立てて、元通りに戻っていく。暗雲が晴れ、地平の彼方に朝日が昇った。橋はその光に照らされて、いっそう美しく輝いた。

これが正しいことなのか、何かが起こる前触れなのか、ぼくには判断がつかなかった。ただ、もしかしたら、もしかしたらと思うことがある。

もしかしたら、この町を滅ぼしていたのは、この町自身だったのではないか。戦争の後、切り刻まれて孤立したこの町は、外界を否定し、この町のことだけを考えてしか平和を取り戻すことができなかった。その結果として、外の世界との間に歪んだ次元を生んでしまったのかもしれない。

「町が元通りになってくね」とイツキはつぶやいた。

「でも、消えてしまった人たちはもう戻らない」

「そうかなあ」首を傾げた彼女を見て、ぼくはあることに気がついた。

潰れたはずの彼女の右目が、元通りになっていたんだ。

ぼくは彼女の頬に手を当てた。「イツキ、眼を開けてごらんよ」

彼女は恐るおそる、ずっと閉ざされていたまぶたを開ける。「見える……」イツキは言った。「見えるよ、トキ！」

眼の傷が癒えただけでなく、彼女の両目は、テテの不気味な瞳ではなく、イツキ本来の愛らしい大きな瞳に戻っていた。穏やかに細められたその大きな二つの瞳には、ぼくと、この背後に広がるぼくたちの町がしっかりと写っている。その虚像を見て、ぼくも、ぼくの眼か本来のかたちに戻っていることに気がついた。

そして人だ。町には人が居た。まるで苔むした大地から生えてくるキノコのように、町中の地面にわだかまった白い光の中から、目覚めるように町人たちが一人また一人と起き上がっていった。まるで町につられるように、全てが元通りになっていく。彼らは死んだわけではなかったのか。単に行き場を、帰る場所を魂が失っていただけなのか――。

「トキィー！」イツキは喜びあまってか、ギターを弾く真似をしながらめちゃくちゃな詞の歌を歌った。「目の前にハリがあるうー、眼の奥の神経にもハリがあるうー、だからわたしはめいっぱい瞳を凝らしてそのハリを見続けて、しっかりとボルトのように釘づけて、バーナーよりも強く鉄骨を焼き付けるのー、思い出を守るため、思い出に縛られることを選ーびーたーいー、かーらあー」

「なんだよ、それ」

「アンメルヘルユニバリウス式アングル型三層構造・第3楽章」と言いながら、イツキはひどく真面目な顔でぼくを振り返り、「待望の」と付け足した。

ぼくが笑うと、彼女も笑った。そしてその華奢な手で、ぼくの手をきゅっと握りしめてきた。

空を舞う伝書鳩たちがいっせいにターンする、虹色の橋が太陽光に輝くプリズム、その向こうで赤錆の浮いたクレーンがゆっくり首を持ち上げる。町の影が元通りになっていく。壊れてしまったものも、壊されてしまったものも。ゆっくりと、元通りに、あるいはほんの少しだけ違うかたちへと。虹の橋を渡ってくる光。それはぼくの手ひらのビー玉にぶつかって拡散し、町全体へ均一に降り注いでいる。ぼくはイツキの手を握り返した。彼女の手はもう冷たくなかない。

「これから、この町はどうなると思う？」不意にイツキからそう訊かれた。

「さあね。この橋を通して何が届くのか……。それ次第じゃない？」

「だったら、ここで見てようよ。何が届いても、この町はこの町のままでいさせなきゃ。もう二度と、次元の狭間に消えてしまわないように」

イツキが眼を閉じて念じると、やぐら塔が不意に形を変えはじめた。ガラスが軋むような音を立て、建物はねじれ歪み出す。そして大地からは透明な蔦が建物を這い上がり、やがて虹の橋と交わり巨大な門のようになる。彼女はゆっくりと眼を開けた。両眼は再びテテの瞳になって、鋭い光を放っている。彼女がもう一度念じると、今できたばかりの門のさらに上に華奢な足場が組まれ、彼女の部屋と同じような形の梁が渡されて、小さなやぐらがそびえ立ち、その中にブランコ型の椅子が垂れ下がった。

イツキはまばたきをしてテテの瞳を心の底にしまいこむ。大きな黒い目を天真爛漫に輝かせ、門の上のやぐらへ軽快に上っていくと、その椅子にちょこんと座り、まるで番人のように橋の彼方をじっと見つめた。「こうすることが、正しいような気がするの」イツキは歯を見せて笑った。朝日が彼女の頬を染め、風はその短い髪をさらさらと乱した。そして今度は「fly

away...um』と、ぼくが詩を書いた古い歌を、口ずさみはじめた。

頭上で脚をぶらぶらとさせているイツキの隣に行こうと、やぐらに片足を掛けたとき。足許に、まるで溶け残った骨のように、地面からひび割れた眼鏡が現れた。ぼくははっとした。そして一瞬、全ての音が掻き消えたように強く心臓が脈打った。振り返る。巻き戻されていく町並み、再生する人々の影。イツキの足が太陽の光を点滅させる。古い映画のコマのように落ちる影の瞬きが、その眼鏡の存在を際立たせる。持ち主の男の名が脳裏を過ぎり、ぼくはそっとイツキに背を向けながら、足許のそれへと手を伸ばす――。

消えていく地割れ、たち上る陽炎、少しだけまだぼんやりとした世界。眼鏡を掛けたぼくの姿は、鏡のようなこの建物の壁に映っていた。その顔を見たぼくの頭には、何一つの言葉も浮かばなかった。眼鏡を外し、ゆっくりと片手のひらの中に包み込み、ゆっくり力を加えていった。まるで蜘蛛が、巣に掛かった蝶を羽交い締めるかのように強く。

金属が軋み、叩かれ、再生していく断続的な響きが木霊する中で、ぼくの手の中で割れるガラスの音は少しさえ目立たずにいとも容易く吸い込まれ、誰の耳にも届かず、その存在は光の粒子へ砕けていった。粉になった破片は風にさらわれ、でも幾ばくかは指先にざらざらと残っていた。その手をぼくは、ポケットの中に押し込んだ。

やぐらをよじ登り、歌い続けるイツキの横に腰掛け、彼女の小さくて柔らかい手を取ったのは、そういう破片にまみれた方とは逆の方の手のひらだった。

"Don't fly bird."

I am a bird that is wishing to  
fly away far away.  
fly away far away. fly away far away

However, wherever  
I go, I will recall the um...  
fly away far away fly away far away...

Don't fly bird.. Here is your nest.  
Don't fly bird... Your lover is here.  
Don't fly bird...  
It is not forgotten that here is your soul  
please even if leaving here.um...

5-kick!!

<http://p.booklog.jp/book/28939>

著者 ケイコモリ

装丁・デザイン ケイコモリ

イラスト 米山球友、ケイコモリ

著者プロフィール：

<http://p.booklog.jp/users/keicy/profile>

↓感想はこちらのコメントへ↓

<http://p.booklog.jp/book/28939>

↓ブックログのpapier本棚へ入れる↓

<http://booklog.jp/puboo/book/28939>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.